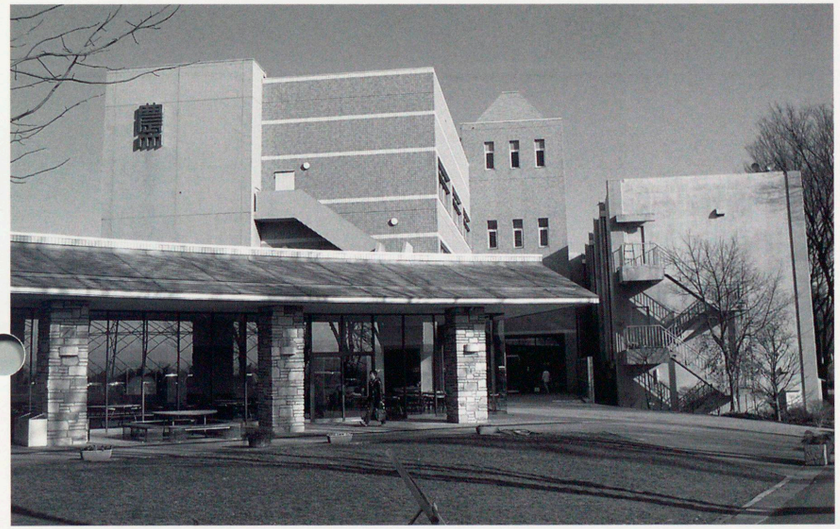
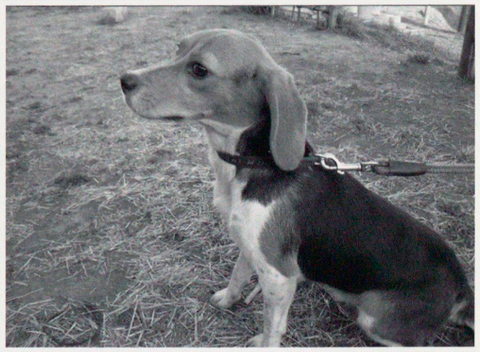
ふじみの

分室
東京農業大学図書館
89. 4. 3
雑誌 受
厚木

No.45

東京農大畜友会





巻頭言

畜産学科長　門　司　恭　典

春は、うれしい旅立ちと出会いの季節です。東京農業大学は、卒業式（三月二十一日・厚木キャンパス）と、入学式（四月六日・世田谷キャンパス）を毎年同じ日に行っています。卒業生の旅立ちはうれしい反面、やはり一抹の寂しさがあります。一方、新しい出会いのある入学式では新入生達の初々しさの中に、期待と不安が入り混じった緊張した表情に思わず頬がゆるんでしまいます。

本誌は、このようなことを考慮し、卒業生と新入生に配布できるよう一年に一度、三月に発行しています。

我々の畜友会は昭和三十五年に発足し、本機関誌「ふじみの」の創刊号を昭和三十六年四月に発行して以来、今回第四十五号を発行するまでに至っています。

先ずは、この三月に卒業・修了される皆さんに心から卒業のお祝い申し上げます。友人や先生方と語り合い楽しかったこと、研究室での当番、卒業論文、クラブ活動などで苦しんだことや大いに頑張ったことなどが思い出されることでしょう。くれぐれも健康に留意し、東京農業大学で培った

真の実力を遺憾なく発揮して、社会で活躍されることを大いに期待しています。

新入生の皆さん入学おめでとう。教職員一同は、皆さんの入学を心から歓迎いたします。「元気で」「明るく」「やる気のある」「心豊かな人間で」「真の実力を」身につけた大学生になって欲しいと願っています。一日も早く畜産学科の一員として充実したキャンパスライフを送られることを希望します。

今日ほど、農業や畜産に逆風が吹いている時代はないように思われます。しかし、ヒトが食べることをやめない限り、農業は衰退することはあり得ません。畜産人として貢献できる真の知識と技術を本学で身につけ、いろいろな問題にチャレンジ精神を持ちつづけて欲しいものです。

最後に、畜産学科は創設六十周年を迎える年であることから記念式典、記念祝賀会、モニメントの設置、記念誌の発刊、学科ロゴマークの作成など多くの事業を計画しています。会員一同一致協力して畜産学科発展のため推進しよう。

平成二十一年一月十日

ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長　西　村　光　平

菜の花の香り漂い、桜の芽もほころぶ今日この頃、今年も「ふじみの」第四十五号を発行することとなりました。

さて、本誌は畜産学科の先生方及び、学生達の原稿、昨年一年間の事業報告をともに記載しています。

本年度は、畜産学科創立六十周年記念を迎えるにあたり、よりいっそう活気溢れる年となると思います。社会情勢が不安定の中、学生一人一人が今何をどう考えているのか、個々に感じた「夢」や「希望」、また「努力」や「不安」などの文章等をご覧下さい。

ふじみの

目　次

巻頭言　門司　恭典

ふじみの発刊にあたり　西村　光平

同窓会だより

同窓会会長あいさつ　渡邉　誠喜

畜産振興会

東京農業大学畜産振興会　便り　半澤　恵

研究室だより

家畜繁殖学研究室
家畜飼養学研究室
畜産物利用学研究室
家畜育種学研究室
家畜生理学研究室
家畜衛生学研究室
野生動物学研究室
畜産マネジメント研究室

ふじみの寄稿原稿

東京農業大学畜産学科三団体の設立趣旨とその使命　渡邉　誠喜
農大讃歌　小栗　克之
大学生活の中で感じたこと　高橋　幸水
守・破・離　多田耕太郎

集う学友

4年間の思い出　4年　野口　桂三
思い出は一生の宝物　3年　谷口　敦史
学校と音楽とバンドと仲間　2年　坂元　春菜
変化の一年　1年　石川絵美子

畜友会だより

平成二十年度畜友会事業報告
平成十九年度畜友会決算報告
特別会計収支報告
平成二十年度畜友会予算
特別会計予算
平成二十年度畜友会役員
第九回厚木キャンパス収穫祭・
第一一七回体育祭事業報告及び結果報告及び反省
次期統一委員長より

東京農業大学農学部畜産学科「畜友会」会則

第九回厚木キャンパス収穫祭・
第一一七回体育祭各部門委員長より

☆駆け抜けた青春☆　統一本部委員長　3年　西村　光平
スマイリーイヤー2008　特別企画委員長　3年　大岡　りえ
第9回　宣伝隊！いぇい！　宣伝隊隊長　3年　芦澤友喜乃
神輿ありがとう　神輿隊長　3年　田辺　義高
等身大の・・・　体育祭委員長　3年　坂井　佑太
櫓に出会って　櫓装飾委員長　3年　尾内　泰穂
みんなに支えられて　装飾委員長　3年　遠矢　真理
支えられた家畜苑　家畜苑委員長　3年　野間口俊二

編集後記　3年　尾内　泰穂

同窓会だより

同窓会　会長挨拶

畜産学科同窓会
会長　渡邉　誠喜

卒業生の皆さん　ご卒業おめでとう御座います。皆さんは四年間、この農大厚木キャンパスにて勉学・実験実習に、クラブ活動にそれぞれ精励され、多くの友人を得られ、人格豊かな立派な畜産技術者として本日、目出度く農学士の学位を取得されました。同窓会を代表して衷心よりお慶び申し上げます。この晴れの日を心待ちされておられたご父母の皆様にも心から祝意を表します。

さて、昨年のアメリカを起点とする世界的な金融恐慌、そして一昨年来の原油価格高騰と地球温暖化阻止による作物のバイオエタノール生産原料への振り替えによる家畜飼料価格の値上げ、更に凝り性もない畜産物の偽装表示など畜産業界を取り巻く環境は大変厳しいものがあります。このような時、皆さんは社会へ参画されるわけであります。このような厳しい状況のときこそ農大畜産学科で習得された実力が発揮できるものであります。新しく卒業された皆さんの活躍を大いに期待するものであります。

農大畜産学科は昭和二十四年に新制大学令により誕生し、本年度を以って丁度六十周年になります。この間の卒業生は七六八二名で、本日の卒業生は勿論、即同窓会員の一員となりますので、皆さんを加えると七九〇七名になります。これまでの卒業生は国の内外においても畜産業並びに関連産業の中核となって華々しく活躍されておられます。

本同窓会は昭和六十三年に畜産学科四十周年を記念して、会員相互の親睦と情報交換の場を提供することを第一義とし、併せて畜産学科学生への援助を目的として設立されたものであります。設立趣旨に基いて、発足以来、講演会の開催、会報や会員名簿・追補版の発行など、そして、優秀卒業論文の表彰・学科畜友会への援助など行ってまいりました。

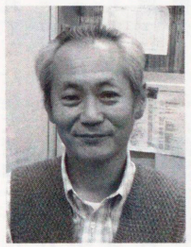
本年十一月二十八日に畜産学科と同窓会の共催のもと創設六十周年記念式典などが執り行われます。本日の卒業生の皆さんも振るって参画されるよう御願いいたします。新しく会員に加わられた卒業生の皆様にはこの東京農業大学畜産学科で勉学されたこと、そして社会で多くの同窓が活躍していることを誇りとし、実社会に貢献されたく希望致します。

新たに本学科へ入学された学生諸君へ。皆さんは多くの大学農学部がある中、この伝統ある東京農業大学畜産学科を選択され見事、ご入学されたこと心からお喜び申し上げ、大いに歓迎いたします。大学農学部の中にあって畜産学科という名称は希有となりましました。申すまでもなく農学は農業、林業、水産業、畜産業などに係る科学にとどまらず、環境、栄養、飢餓、化石燃料の枯渇などの問題解決にも係る分野であり、諸難問を解決するための、あらゆる生物の可能性・特性を生かした「いのちの科学」、すなわち、農学は生命の根源を科学する学問分野であります。或るジャナリストは「現代農学は農業、林業以外に化学、資源、生命科学、医学などに裾野を広げ、今後の可能性は極めて大きい、」と訴えています。食糧生産に係る一次産業の科学としての伝統を大切に護りながら開発・進展させるべきであます。畜産学を基盤として生命科学や環境科学などのフロンテイア部分をも開拓すべきです。

農大生の一員となった以上、今後、永い伝統の中で培われてきた農大精神を身につけ、文武両道を旨として勉学とクラブ活動に精励され、生涯の友と成る良き友人と良き恩師を見つけ楽しい学園生活を勝ち取ってもらいたいものです。そして、創意・工夫と自省を念頭に、常に思慮・分別を弁え、何か自分しか出来ない事柄はないか、を模索し、ある課題に出会ったとき、その問題解決に対して熟慮を重ね、自らを武装する理論を構築して、如何なる論客に対しても論戦を挑む自信を身に付けるような習慣作りに心がけてください。

四年後には農大畜産学科に在学していた、という証を示すことが出来るよう、証創りに心がけてください。ご健闘を祈ります。

畜産振興会



東京農業大学畜産振興会　便り

東京農業大学畜産振興会
会長　半　澤　　恵

東京農業大学畜産振興会が発足して、早十七年が経ち本誌に便りを執筆する時期となりました。そこで「ふじみの」発行にあたり、本会の発足の経緯やこれまでに実施した事業にについて紹介させていただきます。

本会は東京農業大学農学部畜産学科及び大学院農学研究科畜産学専攻に所属する学生の教育・研究の向上に資するために、平成三年三月二十三日に学校法人東京農業大学の認可を得て設立されました。　会の運営に遺漏なきよう学内外から本会の役員として理事、監事が選任され、理事会で必要事項が審議決定され、運営にあたっています。一方、役員以外の評議員によって評議員会を組織し、理事会での審議・決定内容について承認を得ることとなっております。

具体的な事業内容としては、畜産振興会奨学生としての採用が毎年二～四年次生の各学年から一名ずつ計三名、優秀卒業論文賞を毎年一名、姉妹校留学生並びに渡米農業実習生への交通費の一部支給、さらに関連学会誌に学術論文を掲載・発表した学生、または学会で口頭発表した学生に対する表彰を実施しております。学生による論文発表や学会での口頭発表は、年々増加し、会計担当理事も嬉しい悲鳴を上げるほどになり、益々本会の意義が高まってきております。また、社会の経済不況により納入学費の調達が難しい学生も増えており、これらの学生に授業料などの一時貸与も行っております。

平成九年四月にここ厚木キャンパスが開学し、畜産学科が移転しましたが、本年三月には厚木キャンパス育ちの第八期の学科学生ならびに第六期の博士前期課程大学院生、第三期の博士課程後期大学院生が卒業いたします。移転から二年間は、教員が世田谷キャンパスにおり、厚木キャンパスは学生のみという状態でした。そこで本会では、学生への教材提供の意味から平成九年には乳用子牛雌一頭、同十年にはリャマ雌一頭、雄一頭、そして同十一年には黒毛和種子牛一頭を寄贈いたしました。これらの家畜は目下、本学富士畜産農場に繋養されており、黒毛和牛は優秀な二世も誕生するなど、それぞれ実習・実験の材料として活用され、さらに厚木キャンパス収穫祭の家畜苑に参加し、学生はもとより周辺住民にも親しまれております。

また、これら諸事業の成果を取り纏めたものを平成十年より毎年振興会会誌として発行しており、こちらも本年度

で11号を数えるまでになりました。

本会設立の契機は振興会会誌創刊号に紹介されているように平成二年十二月一日、不慮の交通事故により残念にも尊い一命をなくされた江渡宗徳君（当時畜産学科二年在学中）のご両親から寄付を賜った原資を基金として設立されましたが、その後、逐次拡大してきた事業を遂行するため、

一　東京農業大学畜産学科同窓会からの寄付金
二　賛助会員会費
三　一般寄付金
四　その他の収入

などを資産に加え賄われております。より一層の充実した事業展開のためには更なる原資が必要であります。

卒業生には本会の趣旨をご理解いただき、後輩学生の育成のため是非ご支援を賜りたくお願いいたします。特に本会から表彰を受けた方々は本会の活動を心に留めおいて下さい。

在学生諸君には本会の目的に叶う事象が生じた場合には本会を活用され、充実した学生生活を送られるよう祈念し、振興会便りといたします。

研究室だより

家畜繁殖学研究室

私たち家畜繁殖学研究室は、門司恭典教授をはじめ、桑山岳人教授、佐藤光夫准教授、岩田尚孝講師のご指導のもと、大学院生6名、4年生29名、3年生33名で構成され、日々の研究に取り組んでいます。

当研究室では、家畜・家禽等の繁殖生理について研究しています。

具体的には

・家畜の人工授精に関する研究

・家禽における繁殖行動中のホルモンに関する研究

・精子の凍結保存に関する研究

などのテーマを定め、人間社会に対する有効価値を考慮に入れ家畜生産の技術を確立することを最終目標とし、日々研究を進めています。

日常の活動内容としては、3年生は繁殖学の基本的な知識、実験方法や技術を身に付けるとともに、シバヤギ・ミニチュアブタ・家禽の日常の飼育管理を行うと共に、大学院生や4年生の研究・実験の補助をしています。

年間の主な行事は、新入生歓迎会、研究室内スポーツ大会、年2回の納会、収穫祭への参加、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会などがあります。

室員同士とても仲が良く、活気に満ち溢れています。先生方や大学院生とともに会話が多く、各々が自分自身の目標に向かって努力を重ねています。楽しい行事と研究を両立し、充実した楽しい研究生活を過ごしております。

平成二十年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
相原　知佳	雌ニホンウズラに対する拘束時間の違いがストレス反応に及ぼす影響	桑山　門司
上村林太郎	タンパク質の添加がウシ初期胞状卵胞の体外発育に及ぼす影響	岩田　桑山
宇佐美裕子	雌ミニチュアブタの成長期における血漿エストラジオール濃度の動態	桑山　門司
埋橋　良輔	ブタ卵子の体外成熟時間が透明帯と精子の接着性に及ぼす影響	岩田　桑山
小川由貴子	ウシにおける卵胞嚢種が前胞状卵胞数に及ぼす影響	岩田　桑山
加藤　充浩	母牛の体型と子牛の体重の相関関係について	岩田　門司
神山亜由美	シバヤギ[illegible]畜時の栄養状態が前胞状卵胞数に及ぼす影響	岩田　門司

川勝　愛	卵胞液の組成を参考[illegible]した培地を用いたブタ卵子の体外成熟	岩田　桑山
小島　清奈	ウシ精子の常染色体を性染色体に対するISH方法の検討	岩田　桑山
斎藤　ゆい	岐阜地鶏のBrood patch形成に及ぼす甲状腺ホルモン阻害剤の影響	桑山　門司
寒河江貴哉	拘束ストレスが雄ニワトリの血漿コルチコステロンおよびテストステロン濃度に及ぼす影響	桑山　門司
櫻井　建佑	ニホンウズラ種卵の転卵時期と孵化率との関係	桑山　門司
柴山明日香	雄シバヤギにおける給餌の遅延が血漿コルチゾールおよびテストステロン濃度に及ぼす影響	門司　桑山
白石茉里恵	メチルアセトアミドを耐凍剤に用いたニワトリ凍結精液作成法の改良	桑山　門司
白築　章吾	ウシ体外作出胚でのSOX2の発現解析とその抑制の試み	岩田　桑山
高柳　俊昭	精子への熱処理が精子性状および胚発生に及ぼす影響	門司　岩田
田中　裕士	肝臓の状態がウシ卵子の質に及ぼす影響	岩田　桑山
茨田　隆樹	ブタ精液希釈液への界面活性剤の添加が凍結保存に及ぼす影響	門司　岩田
中島　淑恵	ブタにおける妊娠期の背脂肪厚と分娩成績との関係	門司　桑山
町田かほり	雄ミニチュアブタの成長期における血漿テストステロン濃度の動態	門司　桑山
松永　悠樹	グリセリンを耐凍剤に用いたニワトリ凍結精液簡易人工授精法の検討	桑山　門司
松山　友美	ブタ新鮮射出精液の生存精子に占めるY精子率	岩田　桑山
宮村　拓哉	精子への紫外線処理が精子性状および胚発生に及ぼす影響	門司　岩田
村部　俊輔	ブタ凍結精液作成時における効果的な温度降下方法の検討	門司　岩田
山岡　大介	ブタ新鮮精子へのキャパシテーション処理がZP接着精子のY精子率に及ぼす影響	岩田　門司
横山美奈子	ブタ卵子の成熟段階の違いがZP接着精子のY精子率に及ぼす影響	岩田　桑山

川野　紗枝　Polyvinyl-Pyrrolidon添加培地を用いたウシ初期胞状卵胞の体外発育　岩田　桑山

瀬治山裕子　Y染色体を有したウシ凍結融解精子の透明帯への接着性　岩田　桑山

福田　桃子　発生途中のウズラ胚の雌雄判別方法の検討　桑山　門司

〈修士論文〉

伊藤　愛弓　ニホンウズラに対する採血あるいは拘束がコルチコステロン分泌に及ぼす影響

佐々木康仁　ブタ着床前胚の培養条件に関する影響

坂口　陽祐　N-Acetyl-D-Glucosamineがウシの受精に及ぼす影響

家畜飼養学研究室

本研究室は牛・豚・鶏などの各家畜・家禽が健康に保たれ、乳・肉・卵などの動物性生産物を効率よく作り出していくために、どのような飼料（飼料学）を、どれくらい（動物栄養学）、どうやって与えるか（家畜管理学）を追求しています。さらに、飼料の最終形態である糞尿が環境に及ぼす影響（畜産環境保全論）についても研究を行っています。

研究は祐森誠司教授、池田周平教授、黒澤亮助教の指導のもと進めており、成果は日本畜産学会、日本養豚学会、日本家畜管理学会、日本畜産環境学会、日本ペット栄養学会等の学会大会に毎年発表されています。

研究室の活動は、春の新入室員歓迎会と富士農場での専攻実習に始まり、飼料成分分析実験、夏の家畜管理実習（インターンシップ制度）、秋の収穫祭への参加（模擬店：牛・豚・鶏の串焼き、文化学術展：二〇〇八年度動物とエサの教室）、冬の畜産関連諸施設（静岡県畜産技術試験場）の見学を主とした研修旅行、卒業論文発表会、卒業生さよならパーティー、年二回の大掃除に納会と盛り沢山です。この様な活動を通して室員の意思の疎通を図るとともに団結を深めています。先生方の指導は時に厳しいこともありますが、学生の相談には親密に応えてくださり、厳しさの中にもやさしさを感じます。室員は皆仲良く、研究室での時間を楽しく過ごしています。

平成二十年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
池田　祐太	簡便な害虫駆除法の検討	祐森　黒澤
石川　怜	繁殖雌豚の経済寿命延長に対するL-カルニチン給与の効果	池田　祐森
伊村　真和	高脂肪飼料の給与が食糞行動阻止ラットの成長に及ぼす影響	黒澤　祐森
岩澤　美波	"未利用資源の飼料化　―Earthwormタンパク質の低分子化―"	黒澤　祐森
後　萌美	糞中AIA含量を指標とした盲腸における食下物滞留の検討	祐森　黒澤
大竹　彩乃	水洗敷料を利用した厩舎内でのウマの行動	祐森　黒澤
岡　泰平	高脂肪飼料の給与が食糞行動阻止ラットのタンパク質および脂肪の蓄積に及ぼす影響	黒澤　池田
小川　詠梨	暑熱環境下でのL-カルニチン給与が産卵成績に及ぼす影響	黒澤　池田
勝股麻里子	食糞行動を阻止したウサギの消化試験期間の検討	池田　祐森
久保田朋美	出生前からのL-カルニチン給与が子牛の成長に及ぼす影響	祐森　佐藤
後上　友	妊娠末期からのL-カルニチン給与がホルスタイン種の発情回帰に及ぼす影響	祐森　佐藤
齊藤　恭平	成兎におけるメチオニン・スレオニンの要求量推定	祐森　池田
桜井　孝則	金華豚による茶屑利用飼料の消化に関する研究	池田　祐森
柴田　陽香	暑熱環境下の種鶏へのL-カルニチン給与が繁殖成績に及ぼす影響	黒澤　池田
城野　正俊	有胞子性乳酸菌およびオリゴ糖添加飼料の給与がブロイヤーの成長に及ぼす影響	黒澤　池田
鈴木　敬浩	代用乳へのL-カルニチン添加が黒毛和種子牛の成長に及ぼす影響	祐森　佐藤
瀧崎　美穂	ラットを用いたセライト法による消化試験	祐森　黒澤
中尾　紀彦	家畜糞へのペパーミント抽出液の噴霧による害虫忌避効果	黒澤　佐藤

長崎　倫世　高リジン茶屑利用飼料給与が金華豚の肉質に及ぼす影響　池田　祐森

野口　直美　L-カルニチン添加と乳汁中カルニチン濃度の関係　祐森　佐藤

広田　純平　ハーブ抽出液による牛群退避場での害虫忌避効果　黒澤　佐藤

藤原　章義　富士農場の繁殖牛の繁殖成績と飼育要因の解析　池田　佐藤

山口　将也　高リジン茶屑利用飼料給与が金華豚の成長に及ぼす影響　池田　祐森

奥谷　陽　子牛への納豆添加初乳ヨーグルト給与が成長に及ぼす影響　祐森　佐藤

石坂　史明　成兎における祖タンパク質出納に関する研究　祐森　池田

畜産物利用学研究室

本研究室は室長の鈴木敏郎教授をはじめ、多田耕太郎助教授のご指導のもと、大学院生1名、大学4年次生34名、3年次生32名で構成される室員が、それぞれ活発に日々の研究活動などに取り組んでいます。

具体的には、乳・肉に含まれる各成分の物理・化学的特質ならびに栄養・生理学的機能特性を品種、個体、分子レベルで追究したり、その研究成果を食品成分の機能性・保存性の改良、製品製造工程の改良や新しい加工法の開発などに応用するための研究を行なったりしています。

年間の主な活動としては、週一回行われるゼミナールの他、夏休みを利用して行う世田谷キャンパスでの乳酸飲料製造実習、ハム・ベーコン等の製造と収穫祭での販売、卒業論文発表会、新入生歓迎会、前・後期納会、研修旅行、卒業生送別会などがあります。

平成二十年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
猪狩　友紀	畜種の異なる乳の脂肪酸組成の性状に関する研究	鈴木　多田
大房　惇	超高圧処理を用いた鶏肉ソーセージの開発	鈴木　多田
西村　佳澄	植物性乳酸菌を用いたヨーグルトの開発	鈴木　多田
川田　早紀	混合乳酸菌を用いたヨーグルトの開発	鈴木　多田
村上麻衣子		
川崎茉莉奈	畜肉加工品への酵母エキス添加の影響に関する研究	鈴木　多田
山口　春代		
小林　良輔	乳製品中に含まれるトランス脂肪酸含量に関する研究	鈴木　多田
田中　桃子		
白坂　美樹	超高圧処理が生ハムの品質に与える影響に関する研究	鈴木　多田
多田　暢人	乳性タンパク質のゲル化に与える超高圧処理の影響に関する研究	鈴木　多田
富田　啓介		
武笠　直弘		
丸　綾子	酵母エキスを添加した減塩ソーセージの開発	鈴木　多田
筒井　里美		
小泉　良輔	超高圧処理による加圧ゲル形成に関する研究	鈴木　多田
佐藤　力	日本および世界における畜肉製品の生産	鈴木　多田
小川原佳奈		
小林　由佳		
佐藤　友紀		
武田　直樹	産物副産物を用いた肉醤の開発	鈴木　多田
武田雅美子	豆乳を用いたヨーグルトの開発	鈴木　多田
田中　知寿	内臓などを利用した肉かまぼこの製造に関する研究	鈴木　多田
福富　俊勝	畜肉製品の発色および退色防止に与える酵母エキスの影響に関する研究	鈴木　多田
堀田　朋子	畜肉タンパク質のゲル化に与える超高圧処理の影響に関する研究	鈴木　多田
松尾　奈美	日本および世界における乳製品の生産量調査	鈴木　多田
松岡　陽子	植物性乳酸菌を用いた発酵バターの開発	鈴木　多田
吉崎　和樹	食肉の性状に与える超高圧処理の影響に関する研究	鈴木　多田
橋本　亜希	日本および世界における卵製品の生産量調査	鈴木　多田
野上　遥	食肉の凍結および解凍に与える超高圧処理の影響に関する研究	鈴木　多田

荒巻　沙織　農大ブランド肉鶏の肉質に関する研究　鈴木　多田

森川　雄太　ダチョウ肉の肉質に関する研究　鈴木　多田

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、細胞遺伝学、育種学、分子生物学的見地から広範囲にわたる研究活動が実施されています。

当研究室では、花田博文教授をはじめ、野村こう講師、高橋幸水助教の指導の下、大学院生4名、4年生29名、3年生35名によって構成され、室員各自の自覚と相互の協力によりそれぞれの目標に向かって日々研究が続けられています。主な研究テーマとしては家畜（ウシ・ヤギ・スイギュウ）、家禽（ニワトリ）を供試動物として、細胞遺伝学的研究、毛質や毛色に関する研究、血液蛋白型支配遺伝子情報の解析、マイクロサテライトマーカー・ミトコンドリアDNA遺伝子情報による系統遺伝学的研究、品種分化に関する研究などが行われています。

研究室では一年を通して新入室員歓迎会、定期総会、収穫際への参加、研修旅行、特別講演会、卒業論文発表会などが行われ、室員は実験動物の管理、毎週行われているゼミ、定例室員会、それぞれのテーマに即した研究などを日々行っています。さらに研究活動は学内にとどまらず、先生方や院生、学生により学会発表などが精力的に行われています。

平成二十年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
石川美紗子	頭蓋骨画像情報解析によるニワトリの品種分化に関する研究	花田　高橋
伊勢　博祥	ヤギにおける毛色関連遺伝子の解析	野村　花田
今井　佐紀	ミトコンドリアDNA情報に基づくヤギの系統遺伝学的研究	野村　花田
植田麻都佳	体細胞クローン牛の染色体解析	花田
鵜澤　朋未	ヤギの被毛形質に関する遺伝学的研究	野村　花田
海野　絵美	体細胞クローン牛の染色体解析	花田
小野　允嗣	ヤギの被毛形質に関する遺伝学的研究	野村　花田
鴨川　　渓	マイクロサテライトDNA多型情報に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究	高橋　花田
川村　裕加	ミトコンドリアDNA情報に基づくヤギの系統遺伝学的研究	野村　花田
河　　泰憲	黒毛和種に見られた矮小個体の染色体解析	花田
坂場　正裕	マイクロサテライトDNA多型情報に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究	高橋　花田
佐々木達也	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の解析	高橋　花田
佐藤　　文	ヤギにおける毛色関連遺伝子の解析	野村　花田
佐藤　　剛	体細胞クローン牛の後代の染色体解析	花田
志賀　美里	体細胞クローン牛の後代の染色体解析	花田
善光　龍治	マイクロサテライトDNA多型情報に基づくウシの系統遺伝学的研究	高橋　花田
高畑　雄飛	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の解析	高橋　花田
内匠　義浩	DNA多型情報にもとづくマダガスカル在来鶏の遺伝的起源と多様性に関する研究	花田　野村
仲嶺　冴良	マイクロサテライトマーカー情報に基づくヤギの系統遺伝学的研究	野村　花田

野中　麻里　ニワトリのミトコンドリアＤＮＡ多型情報を用いた分子系統学的解析手法の検討　花田　野村

林　千博　マイクロサテライトマーカー情報に基づくヤギの系統遺伝学的研究　野村　花田

福地　峻　ニワトリのマイクロサテライトＤＮＡ多型情報を用いた集団遺伝学的解析手法の検討　花田　野村

堀川　祐輔　ヤギのミトコンドリアＤＮＡタンパク質コード領域の解析　野村　花田

三上　春菜　頭蓋骨画像情報解析によるニワトリの品種分化に関する研究　花田　高橋

皆川　勲　スイギュウ血清アルブミン遺伝子の解析　高橋　花田

吉武　理恵　ヤギの周年繁殖遺伝子に関する研究　野村　花田

吉野　礼子　頭蓋骨画像情報解析によるヤギの品種分化に関する研究　花田　高橋

土屋　友幸　マイクロサテライトＤＮＡ多型情報に基づくウシの系統遺伝学的研究　高橋　花田

岡田　龍　マイクロサテライトＤＮＡ多型情報に基づくウシの系統遺伝学的研究　高橋　花田

家畜生理学研究室

家畜生理学研究室は半澤恵教授をはじめ、吉田豊講師、原ひろみ講師のご指導のもと、大学院生5名、学部4年次生26名、学部3年次生33名で構成されています。

本研究室では、家畜・家禽に発言する生理的な特徴やその生理機構の遺伝的支配に関する研究をしており、①ウマに関する研究②ニホンウズラ・ニワトリに関する研究③ウシに関する研究に大きく分けられます。

①においては、コンディションの変化による血液性状の変動、赤血球膜タンパク質の遺伝子に関する研究などをしています。②においては、抗原に対する抗体産生能・アポトーシス・モノクローナル抗体といった免疫の基礎となる研究、主要組織適合遺伝子複合（ＭＨＣ）の分子遺伝学的・免疫学的解析、ＴＬＲ遺伝子の解析、ＨＳＰ７０，９０遺伝子の解析、腸内細菌と血液性状の関連解析を行っています。③においては、ビタミンＡ代謝における諸所の現象に関する研究、不死化細胞の染色体解析などを行っています。

本研究室における日々の活動を紹介すると3年次には生理学に関する基礎的な実験の技術を身につけるために講義・ゼミ・実験実習を行うとともに、実験動物の飼育管理、院生・学部4年生の卒業論文の補助として協力しています。4年次には前述の研究のほか各個人が興味を持ったテーマを先生方と論議により決定し、卒業論文研究を行っています。院生は、自分の学位論文のテーマに

対して日夜研究に精励し、その結果を学会などに発表しています。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭文化学術展・模擬店、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、年2回の納会、実験動物・家畜舎大掃除、週1回のゼミナール等があります。

なお、平成20年度の卒業論文題目は以下のとおりです。

平成二十年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
三枝　英之	シバヤギ白血球に発現するグルタチオン関連酵素の塩基配列の解析	半澤
野村　幸作	ウマ血球系細胞に発現が予測されるK-Cl共輸送体遺伝子SLC12A familyの解析	半澤
小川　雅也	ウマ血球系細胞に発現するSLC7A familyのORFの多型解析	半澤
初見　清佳	ウマ赤血球に発現が予測されるSLC3A2の免疫学的解析	半澤
市村　和彦	ニホンウズラMHCクラスI領域の構造解析	半澤
宮本　明歩	ニホンウズラBTN2遺伝子座周辺の構造解析	半澤
駒野　雅嘉	ニホンウズラHSF3遺伝子の多型解析	半澤
森本　真菜	ニホンウズラのHSP90遺伝子の熱ショック応答に関するmRNA発現量の個体間比較	半澤
竹田津国美	CjHSP90 αのプロモーター領域の多型解析	半澤
山崎　剛	ニホンウズラCDと遺伝子の構造解析	半澤
奈須野　光	ニホンウズラCD5の抗体評価および組織免疫学的解析	半澤
柳原　美和	幼雛ニホンウズラにおける各臓器のTLR2の免疫組織染色による発現解析	原
猪森　千明	ニホンウズラ肝上皮由来不死化細胞株におけるグルコース飢餓ストレス応答の解析	原
綱島　朋美	ニホンウズラ盲腸由来腸管上皮細胞株の確立	原
小野　夏彦	ニホンウズラP系の腸内細菌叢の培養による同定	半澤
財田　誠	ニホンウズラK系の腸内細菌叢の培養による同定	半澤

鈴木　啓輔　ニホンウズラ有色系における腸内細菌の16SrDNAによる解析　半澤　原
中野　恭平　ニホンウズラP系における血球および抗体濃度の測定　半澤　原
竹本　督史　ニホンウズラK系における血球および抗体濃度の測定　半澤　原
州澤　宗宏　ニホンウズラ血漿における補体力価測定法の確立　半澤　原
寺山　佳奈　野性羽色系ニホンウズラにおける補体力価の個体差およびIgG濃度との相関　半澤　原
木村　耕平　有色系ニホンウズラにおける補体力価の個体差およびIgG濃度との相関　半澤　原

家畜衛生学研究室

家畜衛生学研究室は、室長の渡邊忠男教授をはじめ、山本孝史教授、村上覚史准教授のご指導の下、大学院生一名、四年生三十二名、三年生三十四名で構成されています。

室員は各自で希望する対象動物別に、実験動物班、牛班、豚班、鶏班の四班に分かれ、日々の動物達の世話等も通しながら、各家畜・家禽の疾病とそれに対する診断、予防法及び環境衛生等の研究を行っています。

家畜衛生は家畜・家禽の生命を脅かす健康阻害因子を除去し、生命の延長をはかり、かつ生産性の向上を目的としていましたが、最近では「動物の福祉」という観点から家畜伴侶動物（コンパニオンアニマル）の衛生管理法等、家畜や家禽以外の動物もその対象となってきています。

研究室の年間の主な行事として、新入生歓迎会、月二回の定例会、年二回の納会、収穫祭では模擬店で「しし汁」を出店し、文化学術展にも参加、研修旅行、年末には餅つき、慰霊祭等があり、それぞれの行事において室員の団結を深められるきっかけとなり、各々が目標意識を持って有意義な研究及び研究室活動を行っています。

なお、平成二十年度の卒業論文の題目は次の通りです。

平成二十年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
石井　理絵	トランス脂肪酸含有マーガリンのマウスDSS大腸炎に対する影響	渡邊　村上
伊藤　亜未	クエン酸の投与が犬に与える影響について	渡邊　村上
大栗　靖代	牛体表由来真菌の衛生学的研究	渡邊　村上
金澤　美緒	豚の腸内細菌の肝臓移行について	村上　山本
川上　麻衣	家畜飼料の真菌汚染状況	渡邊　村上
川島　志保	豚の腸内細菌の腸間膜リンパ節移行について	村上　山本
斉藤　志麻	富士農場飼養鶏におけるサルモネラ対策	渡邊　山本
佐々木花菜	現代のアニマルウェルフェアの現状	渡邊　村上
佐藤臨太郎	豚由来大腸菌の生態学的研究・腸間膜リンパ節について	村上　山本
芝　かほる	緬羊の育成期における血清性状	渡邊　村上
菅野　孝一	豚由来大腸菌の生態学的研究・扁桃由来株と結腸由来株の各種性状の比較	村上　山本
瀧澤　昭徳	植物（ハーブ）のネズミ忌避効果の検討	渡邊　村上
津村　麗美	食品の安全性についての意識調査	渡邊　信岡
橋本　真吾	乳酸菌合剤添加飼料の給与が雛の腸管内細菌に及ぼす影響	渡邊　山本
原　千優	きゅう舎敷料の違いが飼養馬の衛生管理におよぼす影響	渡邊　村上
平野　佑樹	鮒鮨由来乳酸桿菌の大腸炎抑制機序に関する研究	渡邊　村上
藤林　芳幸	豚の腸の組織変化と腸内細菌の免疫染色	村上　山本
藤原　未貴	鶏ニューカッスル病ワクチンの合鴨に対する有効性の検討	渡邊　村上
星野　知子	豚の白斑症の肝臓と病変のない肝臓における細菌分離状況	村上　山本

松岡　容子　カテキン給与による豚の腸内細菌の変動　渡邊　山本

三廻部　将　スキンケアクリームが豚の皮膚に及ぼす影響　渡邊　村上

宮川　聡太　リキッド発酵飼料を用いたダチョウの育成試験　渡邊　村上

宮田　祐輔　壮齢犬と老齢犬の血液性状における季節的変動　渡邊　村上

森　結子　飲水量が老齢犬の血液性状に及ぼす影響　渡邊　村上

森田　徳子　脱臭剤の犬舎内脱臭効果について　渡邊　村上

守矢奈緒子　豚の腸における好気的細菌の分離状況について　村上　山本

田井　譲　肉用ブランド鶏作出の試み　渡邊　村上

水野　友之　遺伝学的鶏品種鑑別法の検討　渡邊　村上

榎田新二朗　畜舎における衛生害虫捕獲法の検討　渡邊　村上

白川江梨子　ウズラの系統間におけるコクシジウムに対する感受性の差異　渡邊　村上

辻　はるな　飼育条件の差異が緬羊の血液性状に及ぼす影響　渡邊　村上

中西　文彦　生乳の黄色ブドウ球菌汚染状況調査　村上　山本

野生動物学研究室

本研究室は室長の小川博教授をはじめ、安藤元一准教授、天野卓教授、岡孝夫博士研究員のご指導のもと、大学院生9名、学部4年次生29名、学部3年次33名で構成されています。

我々は、野生動物の分類、行動、生態学的な研究から、保全を目的とした繁殖・生態・内分泌に関する研究を行うため、研究室内に限らず、全国各地でフィールド調査（サンプルの捕獲や生態行動観察等）を行っています。研究の対象はモグラ、コウモリ、ヤマネ、ネズミ類などの小型哺乳類からシカ、ニホンザルなどの大型哺乳類まで幅広い動物の研究を行っています。また、近年はアライグマやハリネズミなどの外来種も研究対象としており、それらが生態系へ及ぼす影響についての研究が精力的に行われています。特に２００８年は静岡県で大規模なハリネズミ生息調査を行い、新たな地域での生息を発見し、生息域の拡大が確認されました。

これらの研究を通して本研究室は、生物資源の保全および人と動物との共存を目指しています。

平成二十年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
飯田　香織	動物搭載型カメラの画像と深度情報によるヨーロッパヒメウ Phalacrocorax aristotelis の採餌生態	安藤
石川　悠	厚木キャンパス及び厚木市南部の緑地における外来鳥類の生息状況	小川　天野
小野寺佳奈	相模川・中津川中流域における鳥類のモニタリング	小川
行田　彩生	スズメ Passer montanus にみる人馴れの速度	安藤
田野倉　望	スズメ Passer montanus の逃走距離に及ぼす環境要因の検討	安藤
市川　雅美	学校教育の副読本と体験活動における野生動物の扱われ方	安藤
岩下　明生	アライグマ Procyon lotor と在来中型食肉目との競合関係の検証	安藤
小林　大輔	足跡スタンプ法の精度向上に関する研究	安藤
坂本　真希	傷病タヌキの放野後の生息状況および、各種鳥獣の野生復帰事例研究	安藤
椎野　綾	センサーカメラの機種および設置方法が調査結果に及ぼす影響	安藤　天野
遠藤　由美	ハクビシン Paguma larvata を中心としたサクランボ食害防護対策の検討	安藤

福田　春菜　広域獣害防止柵における分断部がシカの侵入防止効果に及ぼす影響　安藤

渡部　政之　広域獣害防止柵における分断部の幅とニホンジカの通過頻度の関係　安藤

岡本英理奈　足跡スタンプ法による樹上性齧歯類の生息確認法の開発　安藤

広瀬　絵美　自動撮影による樹上性哺乳類の生息確認法の開発　安藤

加藤　大基　野生アカネズミ Apodemus speciosus の飼育環境への適応性　小川　天野

関口　周一　異なる照明条件に対するヒメネズミ Apodemus argentenus の反応　小川　天野

西山　忠良　静岡県伊東市におけるマンシュウハリネズミ Erinaceus amurensis の食性　安藤

廣門　遥奈　静岡県伊東市および神奈川県小田原市における外来種ハリネズミの生息状況と種の固定　安藤

間嶋　茜　静岡県伊東市および神奈川県小田原市におけるマンシュウハリネズミ Erinaceus amurensis の分布および密度　安藤

松木　隆宏　静岡県伊東市におけるマンシュウハリネズミ Erinaceus amurensis の行動圏・日周活動調査　安藤

伊藤　絵美　日本産モグラ類2種（アズマモグラ Mogera imaizumi およびコウベモグラ Mogera wogura）における光の感受性に関する研究　土屋　安藤

佐戸鈴之助　カワネズミ Chimarrogale platycephala における無人撮影装置に用いた生息調査法　安藤

山縣　瑞恵　小型哺乳類に対する側溝脱出および落下防止対策　小川　天野

大岩　幸太　ニホンザル Macaca fuscata における加害レベルと逃走距離の比較　安藤

矢野　抄子　管理捕獲がニホンザル Macaca fuscata の逃走距離に及ぼす影響　安藤

徳永　舞　ネコが野生動物に与える影響　安藤

小谷野信之助　雌雄のモモンガの糞中性ステロイドホルモン濃度　小川　天野

畜産マネジメント研究室

畜産マネジメント研究室は小栗克之教授と信岡誠治准教授の指導のもと、20年度は3年次生21名、4年次生20人の態勢で本格的に研究室活動を展開しています。畜産（肉牛・酪農・養豚・養鶏）における経営経済問題について、生産から流通・販売・消費などの諸過程と関連付けながら問題解決に取り組んでいます。

とくに、当研究室はわが国の畜産の将来を担う後継者および就農者を養成すること視野においていることからマネジメント演習では簿記演習に加え、パソコンを活用した経営管理ソフトの演習も実施し、さらに畜産経営のプロを育てるべくできるだけ畜産経営の現場にでかけ実践的な経営を学んでいます。また、4年次生は卒論作成に向けた演習などを実施しているほか、研究室の研修旅行では群馬県畜産試験場、グローバルピッグファーム、神津牧場を訪ね見聞を広めています。また、消費者団体のシンポジウム、畜産フードフェア、肉牛シンポジウムなどへも参加し研鑽を重ねています。

研究活動は現場の畜産経営者が抱えている問題を一緒に考え、具体的な解決策を見いだしていくことをモットーとして取り組んでいます。具体的には、昨今の配合飼料価格の高騰に対処するとともに畜産物の安全性と高付加価値化を図るため飼料米の研究に取り組んでいます。20年度は厚木農場（棚沢）の水田で30アールの飼料米の生産を行い、単収は一千七十三キロ（モミ重量）を達成しました。研究室の実験畜舎では羊、地鶏、採卵鶏を飼養していますが、飼料米を自分たちで配合して給与しています。また、飼料米を粉砕する機械を導入し、卒論で豚への飼料米の給与試験を行い、育てた豚や地鶏や卵などの試食も行っています。

なお、平成20年度の卒業論文の題目は次のとおりです。

平成二十年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
阿部真之介	飼料高騰化におけるA牧場（酪農）の経営分析	小栗　信岡
今村　充志	乳房炎対策の経済的検討	小栗　信岡
河田　修一	山地酪農の現状と課題	小栗　信岡
北川　茜	様々な飼育環境におけるジャージー牛の行動分析	小栗　信岡
斉藤　暁史	牛乳TVCMの広告効果について	小栗　信岡
斉藤　淳哉	消費者の飼料米に関する意識についての考察	小栗　信岡

関口　智也　和牛繁殖管理の問題点と改善方法
—S牧場の繁殖部門を事例として—　小栗　信岡

徳井　雄二　飼料米が豚（肉質・体調など）に与える影響について　小栗　信岡

野口　桂三　牛乳の味覚と価格についての検討　小栗　信岡

林　千翔　日本蜜蜂の生態と対馬における伝統的飼育法　小栗　信岡

福士　敬太　飼料米の経済的可能性　小栗　信岡

藤岡　慶子　緬山羊による耕作放棄地管理の現状と展望　小栗　信岡

松浦奈美恵　牛乳の消費動向と消費拡大方策について
—大学生の牛乳消費実態および意向についてのアンケートを軸として—　小栗　信岡

松林　千夏　畜犬の歴史と現在の社会的貢献性　小栗　信岡

渡辺　知宏　我が国における乳製品生産の現状と輸入製品との比較　小栗　信岡

妻木　洋夫　モンゴルの食肉の生産と流通　小栗　信岡

ふじみの寄稿原稿

東京農業大学畜産学科三団体の設立趣旨とその使命

東京農業大学畜産振興会
渡邉　誠喜

東京農業大学畜産学科に属する三団体（畜友会、同窓会、畜産振興会）の生い立ちについて三団体全てをカバーできる人が学科内に居なくなった。そこで、後世のためこの三団体の設立趣旨を書き記しておくためとそれぞれの団体に課せられた使命について私見を述べたい。

東京農業大学農学部畜産学科の前身は同大学専門部畜産科として昭和22年4月に千葉県茂原市高師二二四番地の旧海軍航空隊跡地に誕生し、昭和24年4月に新制大学に移行し、東京農業大学農学部畜産学科となり、昭和34年4月から東京都世田谷区桜ヶ丘一——一——一に同年度の新入学生を迎え入れ、暫時世田谷への移転を開始し、昭和36年3月に移転が完了した。そして、また、平成10年4月からの学科新入学生を厚木キャンパス（神奈川県厚木市船子一七三七番地）に農学部2学科の一つとして移転し始め、平成12年4月には新4年生が厚木キャンパスに移転終了、畜産学科・大学院畜産学専攻一同が厚木キャンパスを本拠地として教育・研究に邁進するようになり現在に至っている。

畜友会：上に述べて様に、千葉県茂原市高師に創設された畜産学科は昭和34年度新入学生から世田谷キャンパスに迎い入れられ、彼らは世田谷一期生ともいえる学生となった。当時、世田谷キャンパスには畜産学科の関係者は居らず、畜産学教育に関係する施設も研究室も皆無であった。従ってこのときの新入学生は折角、畜産学を学びたいと希望に満ち満ちて入学してきたが、このような状況から大変な学問的飢餓に陥り、自分たちで勉学の道標を捜し求めざるを得なかった。その結果、自我の強い学生たちが育まれたと思われる。彼等は入学の翌年、昭和36年6月、畜産学科学生の自治団体として「畜友会」を創設し、平林忠学科長を顧問にいただき、学生の中から委員長を始め委員を選出して、自治活動を始めた。畜友会の会報「ふじみの」の刊行もその1つである。会報名の「ふじみの」とは、上述の茂原市の旧海軍航空隊飛行場一帯の「富士見野」の名称に因んでいる。この会は創設以来51年になる。

「ふじみの」の創刊号を紐解いてみたい、と思ったが、

逸失してしまい希望が叶わず、3号を門司恭典学科長から拝借してみると、そこに当時、委員長の佐川輝男氏の巻頭言が記されている。余り長くないのでその全文をここに書き写した。ここから、当時の学生の心意気を汲み取ってもらいたい。

「ふじみの」第3号　巻頭言

畜友会委員長　佐川輝男

「ふじみの」の由来の茂原農場から厚木農場に移って2年、厚木農場も畜友会メンバーのホームグランドにふさわしく充実され、明日への大きな前進のため私達を待っている。

この会誌も諸先輩のご指導により第3号を発行する運びとなり、誠に喜ばしいことと思う。

科学・技術の飛躍的な進歩の流れの中にあって、私達畜産人は、多くの英才が劃一的な課題から独自の才能を開発し、創造的な才能を発揮され、各々が畜産学の水準を飛躍的に引き上げることを切に希望する。

我々はこの目標のため、明日を力強く踏み出そうでわないか。我々は微力ではあるが、畜友会の意義を常に座右に置き、相互の親睦を計り、交流を活発にし、現在の我々の立場をより認識することによって明日の畜産界に資することが責務であろう。

学園にあって、畜産人としての自覚を養い、社会にあっては自信と意欲と闘志を燃やして邁進しよう。

我々は若いエネルギーを「ふじみの」を通して発散させ、畜友会の趣意にそうよう心から願う次第である。』

と、述べている。

世田谷一期生はどれも気骨逞しい人々が多かった証左であろう。人生ある時期、物心とも貧しい期間があって、自我に目覚め、貪欲に知識・情報を取り込んでいくときがあってよいのではないか。本会はあくまでも学生の自治活動の場として生まれ、学生自らが自己研鑽の場とするための団体である。学生はこの団体に所属している間、この場を活用して、やがて訪れてくる実社会への勉強のため、実社会への助走の時期としてこの機関を大いに活用されたい。最近、頓に言われるガッツの無さ、無気力な学生の姿、自治活動はどこへやら、という風聞を一掃してはどうだろうか。学生各人が何か一つのことを企画して、実行に移し、仲間の集団をリードして、何かを成し遂げる統率力を養ってもらいたい。そして、集団生活を大いにエンジョイできる技量を身につけていただきたい。このことが、やがて社会における存在を明確にする証となる。

自ら求めん者に某かの力が与えられる。

同窓会：・東京農業大学畜産学科同窓会は卒業生の親睦の会として昭和63年11月に設置された。当時、畜産学科卒業生は約四、〇〇〇名に達して居た。一方、学内の大部分の学科には同窓会あるいはこれに準ずる会が存在していた。丁度、学科長を務めていた私は同窓会を立ち上げ、同窓の親睦を図ることも学科長としての責務でもあろう！と(社)日本畜産学会の常務理事をも務めていたので、学会事務局の往復の道すがらの電車の中、会則原案を作成し、同窓学科教員へ図り、更に同窓会発足準備委員会を立ち上げ、私が委員長に就任し、昭和62年から同63年4月にかけて準備を進め、同年7月16日(土)の東京農業大学グリーンアカデミホールにて発起人会を開催した。

同発起人会には、発起人三四四名のうち全国各地から一四〇名の参加を頂き、同窓会発足並びに発足総会の開催に係る諸事項を検討・決定した。そして、学科一期卒業の伊藤澄麿教授を会長に内定し、昭和63年11月25日(金)東京六本木の国際会館にて盛大に発足総会を開催した。その後、会則を改正し、代議員会を組織して1・2年間隔で代議員会を開催し、同時に会員へ呼びかけて講演会の開催や会報を発行すると共に、在学生に対する幾つかの援助もなされた。

同窓会の設立趣旨並びに存在意義は会則にも謳われているようにあくまでも同窓生会員相互の親睦を深め、畜産学あるいは畜産業界の情報交換を密にし、会員の社会における活動の一助になることが第一義である。そして東京農業大学畜産学科学生への支援・便利供与、母校事業への支援などである。それがために常に会員の動向を把握し、定期的に代議員会あるいは総会を開催し、あるいは会報を発行し、収集した情報を会員相互が取得できるよう努力しなければならない。ただ、同窓会の運営は専ら学科在職同窓のボランテア精神による協力でなされている。運営に携わっている同窓のご尽力に感謝することを忘れてはならない。同窓生として互助の精神をもって、ご協力いただきたい。

畜産振興会：・東京農業大学畜産振興会は平成3年3月18日付を以って学校法人東京農業大学理事長の決済の下、同年3月23日に設立されたものである。設立の発端は不慮の交通事故により残念にも尊い一命を失った故江渡宗徳君（当時畜産学科2年在学中）のご遺族から渡邉研究室（家畜生理学研究室）へのご寄付を賜ったことが契機となったものである。

常々、学生教育に当たって奨学制度の充実と経済的困窮学生への臨戦的経済援助体制の整備を望んでいた一個人として、この恩恵を1研究室に留めること無く広く全畜産学科学生の奨学のために、と江渡君のご遺族のご了解の下、設立に踏み切ったものである。そして、発足早々の畜産学科同窓会からも過分なご寄付を頂き基金の一部とさせていただくと共に賛助会員からの会費ならびに卒業生から寄付を原資としている。

本会は会則に謳っているように農学部畜産学科並びに大学院農学研究科畜産学専攻学生の教育並びに学術研究向上に資するため、①学生への奨学金の貸与、②学業成績優秀者に対する奨学、③研修および研究業績に対する奨学、④優秀卒業論文の表彰、⑤その他目的を達成する

ために必要な事業を行う、ことである。発足して18年、毎年目的達成のため多くの学生諸兄姉が表彰・奨学の栄誉を勝ち取り学業・研究に精励している。会の運営には理事会を組織し毎年度当初に、前年度の事業並びに決算を、そして次年度の事業計画並びに予算案を審議・決定した上、評議員会に諮り会を円滑に、しかも公平に運営するよう努めている。

畜産学科が平成10年度、世田谷キャンパスから厚木キャンパスへ再度の移転を契機に学生の研究・教育資材としてホルスタイン種牛雌1頭、リャマ雌雄各1頭、和牛雌1頭などを寄贈すると共に上記事業を確実に遂行している。

参考資料（写し）

東京農業大学畜産学科　渡辺研究室御中

農学部畜産学科渡辺研究室に対する香典の一部寄付希望について

農学部畜産学科2年在学中の江渡宗徳が平成2年12月1日交通事故で不慮の死亡に際し、多くの友人、同僚から寄せられた香典の一部を、本学科の渡辺研究室に寄付いたしたくお願い申し上げます。

記

一、理　由

農学部畜産学科入学時から、免疫学・生理学に興味と関心を持ち、3年次より渡辺研究室を本人が強く希望しており、本人の希望を何らかの形で現したい。

二、金　額

¥三、〇〇〇、〇〇〇円

三、希　望

農学部畜産学科学生に対する奨学金として、誠に勝手ながら、江渡宗徳資金(基金)としてご活用いただきたい。

四、その他

①寄付金の活用方法については、当方の希望は希望として御一任いたします。

②寄付金の支払い時期、方法、その他手続き等については、後日相談させていただきます。

以上

平成三年二月二十八日

一六五　東京都中野区沼袋二―三五―二

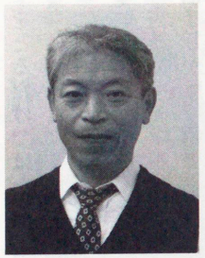
保護者　江　渡　宗　郎

（東京農業大学畜産学科二学年　江　渡　宗　徳）

私は平成19年度まで本会の会長を務めていたが、現在は家畜生理学研究室の半沢恵教授が会長職を勤められている。

今後ともこの会が学生教育のため役立つことを祈りたい。

以上のように三団体の設立の契機、趣旨はそれぞれ異なるも、これらの団体が円滑に、そして学生・同窓会会員の教育・活動に活用されるよう衷心から祈るものである。



農大讃歌

畜産マネジメント研究室教授
小　栗　克　之

東京農業大学（以下、農大と呼ぶ）へ来てまもなく3年目を迎える。嘱託のため、学科会議や種々の学科運営業務等から解放され、研究と教育に専念することができ、いままでにない快適な日々を送らせていただいている。そのため、農大のすべてがよく見え、農大讃歌の一文をここに付したい。

「畜産学科」という名前が残っている大学は、もはや日本では数少ない。少ないというより東京農業大学が唯一ではなかろうか。類似の学科として北海道大学に「畜産科学科」、帯広畜産大学に「畜産科学課程」がある程度である。私の前任の岐阜大学（以下、岐阜大）では、約20年前に類似の学科が消えた。私が農林水産省から岐阜大へ転任した平成2年に「家禽畜産学科」が幕を閉じたのである。開設以来[illegible]弱の寿命であった。私はその家禽畜産学科の第一期生であっただけに残念だった。東京農大の畜産学科は今年（平成21年）で60周年を迎えるという。この生命力の強さは、農大が日本の畜産を名実ともに担っていることの証でもあろう。

私は中央畜産会が主催する「畜産大賞」など、日本の優良な畜産経営を選出する委員を久しく担当している。それらの選出候補農家の現地調査に行くと、経営者やその後継者が農大出身者である場合が少なくない。私が岐阜大に在職中、そのような場面に遭遇したとき、同行していた農大のある教員（私と同じく審査委員）が私に向かって言った。「だから農大でないとダメなのだよ。日本の畜産は・・・。岐阜大などに任せておれないよ」と。得意げに笑いながらいった。私も苦笑しながら「そうだね」といわざるをえなかった。今は、そのような場面に遭遇しても、胸を張って「農大」所属の名刺を農家に手渡すことができる。同じ仲間として頑張ろうと。

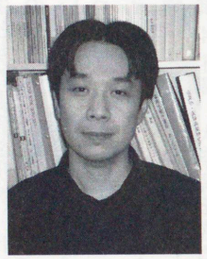
岐阜大から農大へ来て、畜産に対する学生の姿勢が大きく異なることを感じる。岐阜大にはすでに畜産学科はなく、農大にはそれがあるから当然のことであるが・・・。岐阜大では、私の研究室にくる学生は農業や畜産を研究対象として取り上げることはあっても、自分が農家になろうという学生はほとんどいなかった。ところが、農大で私達の研究室にくる学生にはそのような学生がかなりいる。畜産農家出身の学生だけではなく、非農家の学生であっても、畜産の現場に就職したいという学生が少な

からずいることに驚かされた。生活の安定や金儲けということではなく、自分の生き甲斐として畜産の現場で働きたいという姿勢が、それらの学生に共通してみられる。その気概は素晴らしいことだと思う。農大が「実学」をモットーに教育を進めている効果の表れの一端かもしれない。

畜産に対する姿勢だけではなく、礼儀や覇気についても農大と岐阜大の学生の違いを感じる。礼儀についていえば、エレベータに学生と乗り合わせ、エレベータを出るとき、農大生の場合、ドア付近の誰かが必ずエレベータの「開」のボタンを押し、教員をはじめその階で降りる人が皆出るまで、扉を開いて待つ。岐阜大では稀にしかみることのできない光景であった。それが農大の学生の間ではごく普通に行われている。礼儀の良さに感心している次第である。

覇気についていえば、研究室の学生が卒論や農家研修に取り組む姿勢に両者の相違を感じる。農大生は必要性を自分で感じたら、自分で積極的にどこへでも出かける。岐阜大生の場合、私が学生の卒論対象の調査先へコンタクトをとるだけではなく、当初は学生を引率したりすることも多かった。また、調査対象地も日帰りの範囲内であった。調査旅費が学生に対しては、大学から出ることはないためである。その点は農大でも同じであるが、農大の当研究室の学生は北海道から九州まで、必要とあれば泊まりがけで調査や農家研修に行く。海外にまで卒論の調査に行った学生もいる。学生の調査や農家研修に際して、私が相手先にコンタクトをとることもあるが、ほとんどは自らコンタクトをとって出かける。九州へは片道15時間バスに乗って行ったとか、船で中国へ渡ったとかいう。最低の旅費をアルバイトで稼いで卒論研究の調査を行う姿勢は、岐阜大ではみることができなかった。その逞しさは、どこで醸成されたのであろうか。

農大の畜産学科は、今年で60周年を迎えるという。さらに一〇〇周年に向けて頑張ってもらいたい。私はあと3年で70歳になり、一〇〇周年記念まで生きることはできないが、八〇周年までは見届けることができるよう努力したい。畜産物の輸入攻勢の中で日本の畜産の盛衰は、東京農大の畜産学科の存続にかかっていると思われる。卒業生の皆さん、またこれから入ってくる農大生の皆さん、教員共々手を取り合って頑張っていきましょう。



大学生活の中で感じたこと

家畜育種学研究室助教授
高橋　幸水

今回、ふじみのの寄稿依頼がきたので何を書こうかと迷い、数年分のふじみのを引っ張り出し、これまでの先生方が書かれたものを読んでみたりもした。しかし、私の考えていたようなことはすでに書かれてしまっていたように感じた。いろいろと考えた末、このふじみのは学生が読む機会が多いだろうということで、現在から見た私の大学生活（たぶん12年位前・・）を振り返ってみようと思う。

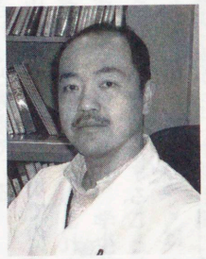
私は一九九三年四月に東京農業大学の畜産学科に入学し、初めて親元を離れ一人暮らしをはじめた。親からはなぜ畜産なのと尋ねられたことがあるが、その理由は「おいしいお肉を作りたい」と「DNAの実験がしたい」からだった。正直、今考えると恥ずかしいような目標であるが、高校を卒業してすぐの学生が考えた目標ということでお許し頂きたい。

2年生の頃の思い出といえば、授業は座学が中心であった。1年生の夏休みには約1週間の富士農場実習があり、実習が終わったころには友人も増え、キャンパスライフが楽しくなってきたのを覚えている。あまり大きな声では言えないが、農場実習は辛かった思い出の方が強い。もちろん、定期試験の辛さも記憶に残るところである。しかし、3年生になって研究室に所属したことで、私のキャンパスライフはガラリと変わった。研究室に所属してからは授業と実験に明け暮れた日々を過ごしていた。3年生のときの実験は、実験器具の洗い物や単純な緩衝液を作ったりすることがメインだったが、先生や院生、4年生の先輩から懇切丁寧に教えて頂いたことは今でも感謝するところである。4年生になるとほとんど授業もなくなり、卒業論文の研究に時間を費やした。この卒論を通じて身についたことは、自分が導き出した結果について自分なりに考察を加え、同じような実験をやっている友人に聞いてもらい議論を交わすことができるようになった事かなと思う。時には、自分の結果に矛盾がないかと疑って見たり・・・。また、結果や考察をわかりやすいように書き上げるにはどの様にしたらいいかだとか、ある1つの物を多角的に見ることができるようになった（例えば、マグカップは上から見ると丸い形をしていますが、横から見ると四角に見えたりしますよね?）。これらのことは大学を卒業して社会に出たときに必ず役に立つと先輩から言われたが、あまりピンとこなかったことを覚えている。よく学生が卒業す

るときに、卒論の研究にまったく関係無い会社に勤めることになりましたと言うことがあるが、社会に出てこそ卒論で学んだことが役に立つのではないだろうか。確かに、社会に出て実験を行うことは無いかもしれないが、仕事の計画を立てたり、その計画の発表や議論をしたり、計画を遂行し結論をまとめたりすることは卒業論文の研究で行った実験とよく似たプロセスだと思う。また、言葉や文章で書き表すのは難しいけれども、研究室に入ってからは精神的な面も成長したように思う。このような研究室生活が無ければ、今の自分は無かっただろう。さらに、私は東京農業大学の大学院に進学して研究を続ける道を選んだ。大学院での研究活動はより広い知識が必要になる一方、時には1つのものに対して探究しなければならない。大学院を卒業する頃には、物事に臨機応変に対応する力がついたように感じた。また、院生時代には、私がまとめた結果や考察の文章を後輩に読ませて意見を聞くなど（決して後輩に添削をさせていたわけではない…）、後輩にも大変お世話になったことが思い出される。もちろん、最もお世話になったのはご指導を頂いた先生と私の生活をサポートしてくれた両親である。これらの人々には大変感謝しているが、まだ恩返しできていないことが気がかりである。今思うと、この学生時代をもっと有意義かつ無駄の無いように過ごせばよかったなぁと感じる。もし、学生さんが読んでいたらこのような後悔はしないようにしてほしい。

学部4年間、大学院を含めると約10年間で勉強や研究ができたことに加え、たくさんの友人も作ることができた。これらの友人達とは今現在も付き合いが続いている。卒業した直後の頃は意識していなかったが、大学時代にできた友人は一生物ということが今になってようやくわかってきた。これらの友人の中には大規模農家の経営をしている者や検疫官、畜産学科を卒業してコンピューター関係会社に働いている者もいる。時々、私は友人と連絡を取り、仕事でわからないことや疑問に思ったことがあれば相談をしている。いつも学生には、「信頼できる友人は大切にしたほうがいいぞ」と言っているが…、10年位すると気がつくのかもしれない。

最後にまとめると、大学生活では畜産の勉強ができたのはもちろん、人間関係や物事の考え方など「形として残らないもの」ではあるが、今後数十年生きていくうえで役に立つものが得られたのではないかと私は考えている。



『守・破・離』

畜産物利用学研究室助教授
多田　耕太郎

昨年の四月、諸先生のお力添えにより十九年振りに古巣である畜産物利用学研究室に戻ることとなった。本稿では私のこれまでの歩みを紹介するとともに学生諸君へ対する思いなどを綴ってみることにする。

昭和六十年、学部三年生となった私は肉利用学研究室に入室した。当時、畜産物利用学関連の研究室は肉利用学と乳利用学の二つがあり、肉利用研には鬼原新之丞先生（元教授）と松岡昭善先生（前教授）、乳利用研には山中良忠先生（元教授）と古川徳先生（前教授）がおいでになった。私は松岡先生にご指導いただき、イノブタの肉質に関する研究の卒業論文に取り組んだ。学部四年生になり進路を決める段になり、自身の研究に対する興味の高揚と、丁度、畜産学専攻の大学院が設置されたことから進学することとした。

私の学部卒業と同時期に鬼原先生が定年退職され、肉利用研と乳利用研は統合、現在の畜産物利用学研究室の体制となり、大学院では、信州大学より利用研にいらした鴇田文三郎先生（元教授）と、研究室のOBで、当時、世田谷キャンパスの総合農産加工実習所（現：食品加工技術センター）においでになった鈴木敏郎先生（現教授）の指導の下、超高圧処理を利用した畜産物の加工に関して研究を行った。この超高圧の食品への利用研究は鈴木先生が豪州留学中に取り組み、日本でも先駆者として推進した新しい研究で、未知の部分が多く、実験を進めて新知見を得ることがとても楽しく、毎日が充実していた。また、総合農産加工実習所は学部共通施設で同所の研究室には農芸化学、栄養、醸造などの学科からも学生が集まっていたことから、畜産分野以外の研究を知り、意見交換をできたことは大きな収穫であった。農大在学中に諸先生から教えをいただき、興味深い研究と出会い、一生付き合える多くの友人を得られたことは大変に幸運であったとつくづく思う。

大学院修了後、鴇田先生に紹介いただいた福島県の女子短大で教員となり、栄養士を目指す学生達の教育に携わった。その後、富山県の公設研究所へ移ったが、ここでの仕事は刺激的で大変勉強になった。富山県はアルミ産業関連や売薬さんで有名なように医薬品関連などは企業の設備が充実しているが、食品産業はそうでもなく、自社で品質管理や製品開発をすることが困難な事業所が多い。このような背景から研究所には食品業界から多様

な業務相談が寄せられ、そのほとんどが生産の現場で起きている問題であることから、度々現場に出向いた。現在、私の主要研究テーマである畜産副産物（骨、皮、内臓、廃鶏など）の有効利用も現場からの要請に応えて始めたものである。愚息の好きな警視庁を舞台にした映画で主役の織田裕二扮する刑事が「事件は会議室で起きているんじゃない、現場で起こっているんだ」と叫ぶシーンがあったが、正に研究室、実験室では把握できないものや自分の持つ経験や知識だけでは充分に対応できないものもあり、民間企業の現場の風に触れ、農大の榎本精神『学びて後、足らざるを知る』を実感することができた。また、企業との共同研究では知的財産権を第一に重んじ、特許出願による公表まで秘密裡に進めることが求められた。考えてみると最終的な加工食品の製造技術を開発しているのだから至極当然なのだが、着任当初は少々戸惑うところがあった。この点は生産された畜産物の加工、製品化を目指す畜産物利用学でも大いに意識しなければならない部分で、良い経験をさせていただいたと思う。この経験を活かした『現場で使える研究教育』を実施できればと考えている。

富山で十七年間、現場での貴重な体験を経て農大に戻った訳だが、学生時代からこれまでの間、私には常に心に留めている言葉があり、学生諸君にも参考にしていただけたらと思い、紹介することとする。その言葉は表題とした『守・破・離（しゅ・は・り）』である。これは、私が幼児の頃から二十数年間に亡父の指導を受けた剣道の師範がよく口にした言葉で、人が独り立ちするまでの成長段階を示し、茶道の創始者、千利休の精神を伝える歌から生まれたそうである。

『守』指導者（親、先生、上司など）の教えを守り、基礎基本を身につける最初の段階。

『破』自分自身で問題を見つけ、独自の解決法を考え、それが教えを破るものであっても試してみる段階。

『離』指導者の下を離れて自立し、自分で学んだことを発展させ極め、独自の世界を創り出す段階。

これらの成長段階は学生にも社会人にも当てはまるもので、なかでも『破』の段階が大切で難しく、『守』の殻の中に籠もらず、殻を突き破る努力をすることで人は成長するのだろう。私もまだまだ精進するとともに、学生諸君が学問の楽しさを知り、問題を解決する喜びと達成感を味わい、社会に出てからも知的好奇心を持ち続けられるよう、歪みない破り甲斐のある『守』の殻を提供するべく、全力を尽くしたいと思う。

集う学友

4年間の思い出

畜産学科　4年
野口　桂三

長いようでものすごく短い、大学に入学したての頃はワクワクと胸を躍らせ、まだ4年間ある、卒業なんてまだ先のこと思っていた。それから、4年という時間はあっという間に過ぎてしまい今振り返るとあれもやっておけばよかったということがある。しかし、後悔は一個もない。

この4年間はとても充実していて、1年の時、畜友会の先輩に出会ったのは一番大きな出来事であった。先輩のアパートで朝まで騒ぎ、寒い時期に海に行って入り、でもやる時はやるというバランスが先輩たちはすごいと感心して、1・2年の頃は日々が勉強であった。

2年の時、自主的に山地酪農をやっている岩手の農家へ実習に行ったのも大きな出会いであった。今までの酪農感覚を覆すようなスケールの遊牧地に牛を50頭ほど放牧し、その大自然のなかを自由気ままに生活している牛は顔が穏やかであった。また、お世話になった農家さんもやさしく、この出会いとそこで見てきたもの、感じたものは一生忘れない。

3年になり畜友会委員長と畜産学科統一本部の委員長を務め、出会いの幅がさらに広がった。世田谷キャンパスの統一本部との交流もあり、そこで共に統一委員長をやった仲間。中でも農学とセンピーの委員長とは兄弟のような感覚で楽しくて、大変ではあったが頑張ることができた。そして、日々の学校生活で授業と授業の間の暇な時間になると学科室に行く、そこには、ご飯を食べに行ったり（びっくりドンキ）、騒いだり、収穫祭の準備、スポ大、体育祭など辛いことも楽しいことも共にしてきた、かけがえのない仲間がいて、家族のような感じでした。

研究室ではマネジメント研究室を一期生という事で大変なこともあったけど、新しく友達もでき、釣りに行ったこと研修旅行の日寝坊して車であとを追いかけたこと、何にも縛られない研究室ということもあり、自分のやりたいことができ学びたいことが学べ、いろいろな牧場を見たこと酪農家さんと話ができたこと自分にとってとてもプラスな経験ができました。

大学1年の時とは、考え方変わり、知識も広がりこの4年間で出会ったものは、かけがえのない大切なもので、お金では買えない教科書みないなものであったと思います。ここで出会った、先生、先輩、友達、後輩すべての人に感謝し、誇りを持って卒業して、これからも成長する出会いを求めていきたいと思います。

最後になりましたが、これから経験したことのない困難があったとしてもみんなのことを思い出して乗り越えていきたい。5年後か10年後かいつになるかわからないけど、また、みんなに出会えた時が楽しみです。お元気で

思い出は一生の宝物

畜産学科　3年
谷口　敦史

この農大に入ってもうすぐ三年が経つ。今思えば本当にあっという間に過ぎていった気がする。この三年間、サークルや、授業、教職、バイト、研究室などやってきたけど楽しかったこと、悲しかったこと、うれしかったこと、大変だったこと、いろいろあったけどすべてが私にとって最高の思い出だ。この大学に入ってよかった言えるくらい、どれも本当にいい経験ができたが、一つだけ特別な経験をしたことがある。

それは、ちょうど一年くらい前にある友達から「沖縄の西表島に行って農家さんのサトウキビ狩りのボランティアをやりにに行かないか。」という話だった。

その農家さんのボランティアとは、沖縄サトウキビ狩り援農隊という組織であり、毎年一月から三月末の期間、サトウキビの収穫時期に全国の大学生が参加している。学生は主に厚木キャンパス以外に世田谷キャンパスや日大の学生が多いが九州から北海道までいろんな学生が参加している。収穫時期の中で自由に行きたい期間が選べるので私は、三月前半から後半までの二週間やることに決めた。寝泊まりするところは、「サトウキビ畑」という民宿施設でそこで援農隊にきた学生が合同で寝泊まりし期間の間、一緒に暮らす。またいくつかある農家に手伝いに行く人を振り分け、ローテーションしていく形である。その頃の私は、沖縄に行ったことがなかったので農家さんの手伝いのついでに遊びいくつもりだった。今思うと半端な思いな自分に情けないとさえ感じる。

案の定そんな思いは一日で消えた。初日から重労働で午前中だけですぐにバテてしい、手伝いになるどころか足をひっぱってしまった。ただナタでキビを刈って、いらないところを鎌で落とし、紐で縛るだけなのにすごくサトウキビが重い、それを全て手作業でやる。単純作業だがすごく手間暇がかかる作業に正直驚いた。刈る機械はあるのだが、その機械を使うとサトウキビの品質が落ちてしまい、高値で売れないため手作業でやるしかない。でも四月になるとサトウキビを出荷する工場が閉まってしまうため急がなくてはならない。もし間に合わなかったときは、残っているサトウキビを全て処分しなければならないのだ。そんな畑が各農家にいくつもあるのを見て気が遠くなる思いと農業の大変さを痛感した一日だった。

もちろん援農隊は、辛いことだけではない、楽しかったことはそれ以上にある。作業は厳しいけど、どの農家さんも、とても優しく親切にしてくれるので全然苦にはならなかった。それから日本の最南端に近い西表島は、本島にはない独特の自然と環境であふれており、その土地も風景もとても美しく見え、これが沖縄なんだなと実感がわいた。そして援農隊に参加してよかったことは、他の大学生と交流が深められたことである。「サトウキビ畑」は、みんなで協同で生活するのですぐに親しくなれる。民宿とはいっても世話をしてくれる人は、いないので食事、洗濯、掃除はもちろん「サトウキビ畑」で暮らすことはすべてみんなで協力する。農家の手伝いが終わった後、みんなでミーティングをし、一人一人今日一日の反省と明日の目標を言う。その後、夕食、宴会、談話など毎日みんなで楽しい夜を過ごした。そんな日を毎日過ごしていると帰りたいと思うどころか、ずっとこんな日が続いたらいいとさえ思うようになった。

西表島に滞在している期間が残り少なくなるにつれてだんだんこの島にいられなくなると思うと悲しくなった。そして、仲間との別れが一番辛かった。この島を離れたらもう、会えない人もいるかもしれない。そう思うと余計に辛くなった。それだけ良い経験ができたのかもしれない。

あれからもうすぐ一年が経つ。また今年もサトウキビ援農隊でたくさんの学生が西表島でサトウキビ狩りをすると思う。私は、就活で今年は参加できないが、来年はまた西表島に行きたいと思う。もし、沖縄でサトウキビ刈りをやってみたいと思う人は、是非参加してほしい。こんなことができるのは、学生の内だけしかないし、きっといい経験ができると思います。

私は、後悔は絶対しないと胸を張って言える。だってこんなにすばらしい人々に出会えるのだから。

学校と音楽とバンドと仲間

畜産学科　2年
坂元　春菜

私は現在、軽音楽部に所属している。二年生になり学校生活にも慣れ、一年生のときよりも積極的に参加するようになった。

そもそもベースを弾き始めたのは大学に入学してからで、本当に初心者。まさか自分がバンドを組んだり、スタジオに行って練習したり、ましてライブに出演するなんて思ってもいなかった。

今活動しているバンドは、ボーカル：ユキコ、ドラム：チカコ、ベース：私で一年生の早い段階で結成したのだが、肝心のギターが見つからず、活動もあやふやな状態が続いた。

そこに現れたのが畜友会でも大忙し・笑顔が可愛いギタリスト、はーちゃんだ。彼女が加入したことでバンドのテンションは一気にあがった。全員で初めて合わせたときの感動。本当に楽しかった。私はあの感動を忘れない。

そして二年になり、ちょっと遅いデビューライブを迎えた。4月の新入生歓迎ライブ。緊張でガチガチ。笑顔もひきつる。そんなときに先輩方や部員達がかけてくれた優しい言葉。そして演奏後の暖かくも厳しい正直な感想。全部が全部すごく有り難かった。自分の演奏はあまり覚えていないけれど、このとき初めて正式な「部員」になれた気がした。

そこから一年間、バンドはノンストップで活動した。部がライブハウスを借りて行う定期公演会にも出演し、ライブの出演回数をどんどん増やしていった。特に、夏合宿や収穫祭で演奏できたことは、私にとってとても素晴らしい思い出だ。

この間、私はいくつかのバンドに参加し、いろいろな考えに触れ、悩み、そして楽しんだ。このことはきっと、いつか自分を成長させてくれるだろうと思う。

今年は三年生になって所属する研究室も決まり、学業の方もますます忙しくなる。今のバンドは練習をすごく大切にするから、すごく時間をかけるから、あと何回ライブに出られるかわからない。だからこそメンバーとの時間は大切にしたい。初めて合わせたときのような感動を、また一緒に味わいたい。そして、充実した大学生活を過ごしたいと思う。

変化の一年

畜産学科　1年
石川　絵美子

私がこの大学に入学してから、早くも一年が経とうとしています。この一年は色々な変化のあった年でした。

入学したての頃は、慣れない早起きと長時間の通学に疲れ果て、さらに初めて触れる分野の講義に、普通高校出身の私は不安だらけでした。正直、畜産に特別興味があったわけでもなかったので、四年間ちゃんと通うことが出来るだろうかと考えたこともありました。一生懸命勉強するわけでもなく、サークル等に打ち込むわけでもなく、ただなんとなく毎日が過ぎていきました。そんな生活を変えてくれた出来事が二つあります。

一つは、夏休みの富士農場での畜産実習です。初めて家畜にふれあい、実物を目の前にしての講義は、いつもの教室での講義とは違い、飲み込みも早く、沢山のものを得ました。さらに畜産を学ぶことに、少しずつですが、楽しさを見出せるようになりました。将来の選択肢の幅も広がり、とても良い経験になりました。

もう一つは統一との出会いです。昔から文化祭・体育祭のような行事が好きな私は、統一本部というものを知り、とても興味を惹かれました。今年は少しの手伝いしか出来ませんでしたが、その中で素敵な先輩方や仲間達と出会い、とても楽しい時間を過ごしました。そして私も統一に入って、もっと収穫祭に携わりたいと思い、統一に入ることに決めました。

今、大学生活が楽しいのは。この二つの出来事はもちろん、いつも支えてくれる家族や友達のおかげでもあります。これらの人たちには、どんなときも感謝の気持ちを忘れずにいたいです。

残りの三年間の大学生活、決して楽しいことばかりではないと思うけれど、そのときは仲間達支え助け合いながら、色々なことにチャレンジしていきたいと思います。

平成20年度畜友会事業報告

平成20年度6月1日～平成21年度5月31日

平成20年度

5月26日 ～5月29日	厚木キャンパス春季スポーツ大会参加
7月中旬	1年生対象収穫祭説明会(於　授業終了後)
7月30日	平成20年度畜友会定期総会(於　トリニティーホール)
10月15日	第9回厚木キャンパス収穫祭　及び 第117回体育祭畜産学科統一本部本部開き(於　食堂・けやき)
10月31日	第9回厚木キャンパス収穫祭前夜祭参加
11月1日 ～2日	第9回厚木キャンパス収穫祭参加 (家畜苑、研究棟アート、特別企画、宣伝隊)
11月4日	第117回体育祭参加(於　世田谷キャンパス)
11月17日	第9回厚木キャンパス収穫祭　及び 第117回体育祭畜産学科統一本部慰労会(於　食堂・けやき)
12月15日 ～18日	厚木キャンパス冬季スポーツ大会参加

平成21年度

3月20日	畜友会誌「ふじみの」45号発行
3月21日	卒業祝賀会・卒業記念品贈呈(於　厚木キャンパス)
4月上旬	オリエンテーション参加(於　富士畜産農場)
4月下旬	新入生歓迎会(於　食堂・けやき)

平成19年度収支決算報告

収支予算書(平成19年6月1日～平成20年5月31日)

Ⅰ.一般会計

収入の部　(単位：円)

科目		予算額	決算額	差額	備考
会費	新入生(20年)	1,800,000	1,260,000	540,000	※1)
	編入生(20年)	50,000	10,000	40,000	※2)
	過年度分(19年)	3,290,000	460,000	2,830,000	※3)
雑収入		100	112	△12	
当期収入合計(A)		5,140,100	1,730,112	3,409,988	
前期繰越収支差額		1,451,621	1,451,621	0	
収入合計(B)		6,591,721	3,181,733	3,409,988	

※1) 新入生：10,000円×126名
※2) 編入生：5,000円×2名
※3) 過年度分：10,000円×46名

支出の部　(単位：円)

科目	予算額	決算額	差額	備考
収穫祭援助費	700,000	700,000	0	特別会計へ
ふじみの印刷費	430,000	428,400	1,600	
卒業祝賀会費	180,000	183,395	△3,395	
卒業記念費	400,000	243,600	156,400	
新入生歓迎会費	150,000	143,201	6,799	
消耗品費	30,000	20,584	9,416	
通信運搬費	100,000	800	99,200	
雑費	50,000	0	50,000	
予備費	230,000	15,000	215,000	※1)
当期支出合計(C)	2,270,000	1,734,980	535,020	
当期収支差額(A)-(C)	2,870,100	△4,868	2,874,968	
次期繰越収支差額(B)-(C)	4,321,721	1,446,753	2,874,968	

※1) 会費を2回支払った学部生(10,000円×1名)
および4年間分の会費を支払った編入生(5,000円×1名)への返金

残高証明

郵便局	¥1,122,174
三井住友銀行(畜友会)	¥324,596
合計	¥1,446,753

特別会計収支決算報告

平成19年6月1日～平成20年5月31日

Ⅱ．収穫祭特別会計

収入の部　（単位：円）

科目	予算額	決算額	差額	備考
一般会計より	700,000	700,000	0	
雑収入	1,000	28,577	△27,577	※1）
当期収入合計（A）	701,000	728,577	△27,577	
前期繰越収支差額	145,229	145,229	0	
収入合計（B）	846,229	873,806	△27,577	

※1）祝儀：第8回収穫祭実行委員会　10,000円×2
ラウンドハウス　1,000円×2
世田谷キャンパス収穫祭6本部　6,000円

支出の部　（単位：円）

科目	予算額	決算額	差額
統一本部	395,000	357,658	37,342
特別企画	0	0	0
体育祭	65,000	57,391	7,609
宣伝隊	150,000	31,542	118,458
装飾	50,000	27,720	22,280
家畜苑	130,000	130,000	0
予備費	30,000	0	30,000
当期支出合計（C）	820,000	604,311	215,689
当期収支（A）－（C）	△119,000	124,266	△243,266
次期繰越収支差額（B）－（C）	26,229	269,495	△243,266

上記のとおり報告する。
平成20年7月30日

畜友会会長　門司恭典 ㊞

上記に相違ないことを認める。
平成20年7月30日

桑山岳人　岡泰平

平成19年畜友会監査委員
原ひろみ　野間口俊二

監査報告書

畜友会会則第9章、第29条及び30条の規定に基づいて平成20年7月30日に平成19年度業務及び会計監査を実施致しました。

事業報告、通帳、出納長及び領収書を精査した結果、適切に遂行されたことを認める。

平成20年度畜友会予算（案）

平成20年6月1日～平成21年5月31日

Ⅰ．一般会計予算（案）

収入の部　（単位：円）

科目		予算額	決算額	差額	備考
会費	新入生（H21年）	1,800,000	1,260,000	540,000	
	編入生（H21年）	50,000	10,000	40,000	
	通年度分（H20年）	3,642,500	460,000	3,182,500	※1）
雑収入		100	112	△12	
当期収入合計（A）		5,492,600	1,730,112	3,762,488	
前期繰越収支差額		1,446,063	1,451,621	△5,558	
収入合計（B）		6,938,663	3,181,733	3,756,930	

※1）1年生：10,000円×131名
2年生：10,000円×100名
3年生：10,000円×114名
7,500円×　2名（2年次に転学）
5,000円×　5名（3年次に編入）
4年生：10,000円×　11名
7,500円×　1名（2年次に転学）
5,000円×　7名（3年次に編入）

支出の部　（単位：円）

科目	予算額	決算額	差額	備考
収穫祭援助費	700,000	700,000	0	
ふじみの印刷費	430,000	428,400	1,600	
卒業祝賀会費	180,000	183,395	△3,395	
卒業記念品費	400,000	243,600	156,400	
新入生歓迎会費	150,000	143,201	6,799	
消耗品費	30,000	20,584	9,416	
通信運搬費	50,000	300	49,700	
特別講演会費	30,000		30,000	
研究室スポーツ大会費	30,000		30,000	
雑費	50,000	0	50,000	
予備費	4,888,663	15,000	4,873,663	
不明金		500		
当期支出合計（C）	6,938,663	1,734,980	5,203,683	
当期収支差額（A）－（C）	△1,446,063	△4,868	△1,441,195	
次期繰越収支差額（B）－（C）	0	1,446,753	△1,446,753	

特別会計予算

平成20年6月1日～平成21年5月31日

Ⅱ．収穫祭特別会計予算（案）

畜友会援助費

収入の部

（単位：円）

科目	予算額	前年度予算額	差額
一般会計より	700,000	700,000	0
雑収入	1,000	28,577	△27,577
畜産学科助成金			
当期収入合計（A）	701,000	728,577	△27,577
前期繰越収支差額	269,495	145,229	124,266
収入合計（B）	970,495	873,806	96,689

支出の部

（単位：円）

科目	予算額	前年度予算額	差額
統一本部	400,000	357,658	42,342
特別企画	0	0	0
体育祭	70,000	57,391	12,609
宣伝隊	100,000	31,542	68,458
装飾	50,000	27,720	22,280
家畜苑	100,000	130,000	△30,000
予備費	250,495	0	250,495
当期支出合計（C）	970,495	604,311	366,184
当期収支差額(A)-(C)	△269,495	124,266	△393,761
次期繰越収支差額(B)－(C)	0	269,495	△269,495

農友会学科助成金

収入の部

（単位：円）

科目	予算額	前年度予算額	差額
一般会計より			
雑収入			
畜産学科助成金	1,590,000	1,670,000	△80,000
当期収入合計（A）	1,590,000	1,670,000	△80,000
前期繰越収支差額			
収入合計（B）			

内訳

（単位：円）

科目	予額算	前年度予算額	差額	備考
学科助成金	590,000	508,834	81,166	
神輿代	120,000	107,142	12,858	
パネル代	400,000	96,831	3,169	
応援合戦衣装代	130,000	128,770	1,230	
事務費	30,000	15,640	14,360	
記録費	50,000	49,251	749	
交通費	160,000	111,200	48,800	
学内装飾費	180,000	179,570	430	
家畜苑費	820,000	793,455	26,545	
鋼管代		144,781	△144,781	※1)
鋼管リース代	170,000		170,000	※1)
運搬代	390,000	402,648	△12,648	
装飾代	260,000	246,026	13,974	
合計	1,590,000	1,481,859	108,141	

※1）今年度より「鋼管代」を「鋼管リース代」と名称変更しました。

平成20年度畜友会役員

平成20年6月1日～平成21年5月31日

役職	氏名	研究室
会長	門司恭典	家畜繁殖学研究室
副会長	村上覚史	家畜衛生学研究室
副会長	鈴木敏郎	畜産物利用学研究室

・執行委員

委員長	3年 西村光平	家畜育種学研究室
副委員長	3年 遠矢真理	家畜衛生学研究室
	2年 大谷敬直	家畜育種学研究室
書記	3年 芦澤友喜乃	家畜育種学研究室
	2年 上釜安貴	家畜衛生学研究室
会計	3年 甲斐田浩司	家畜育種学研究室
	2年 高山紗恵	家畜衛生学研究室
渉外	3年 秋澤克哉	家畜飼養学研究室
	2年 松井健太	家畜飼養学研究室
企画	3年 田辺義高	家畜生理学研究室
	2年 広沢竜次	畜産マネジメント研究室
庶務	3年 秋山悠	家畜育種学研究室
	2年 下山拓哉	家畜生理学研究室
編集	3年 尾内泰穂	家畜飼養学研究室
	2年 三宅美夏	家畜繁殖学研究室
監事	桑山岳人	家畜繁殖学研究室
	原ひろみ	家畜生理学研究室
	3年 野間口俊二	家畜繁殖学研究室
	2年 佐々木裕哉	家畜飼養学研究室

第九回厚木キャンパス収穫祭・第一一七回体育祭
事業報告及び結果報告

【事業報告】統一本部

畜産学科統一本部の第9回厚木キャンパス収穫祭での活動は、収穫祭宣伝活動、研究棟アート、特別企画、家畜苑、櫓装飾、体育祭を行いました。

統一本部（委員長、副委員長）の活動は先生方との連絡をとり、畜産学科統一本部「の各部門及び第9回厚木キャンパス収穫祭実行本部、農学科統一本部、そして世田谷キャンパス13学科統一本部との連絡を取り、また畜産学科統一本部をまとめ9回目となる厚木キャンパス収穫祭、第一一七回体育祭を成功させようと最後まで全力疾走しました。

本年度は良い雰囲気の中で作業を行うことができ、天候にも恵まれ、収穫祭・体育祭当日の3日間とも晴天の中で行う事ができました。また、本年度の収穫祭は昨年度に増して活気に溢れ、大盛況でした。これも皆様方のご協力があってこそだと思います。

来年度は厚木キャンパスでの収穫祭が第10回を迎えるに当たり、本年度学んだ事を活かし、より良い収穫祭・体育祭を作り上げたいと思います。

特別企画

今年も多くの学生や地域の方々が参加し、楽しんでいただけるようなステージを特別企画本部が一丸となって作り上げました。

今年の収穫祭は、子供に大人気の「めざせ！バルーンマスター！」や親子が一つになって参加する親子対抗のゲーム企画「親子パラダイス」、農大ならではの問題を出題する「雑学王・○×」等、毎年恒例の企画を来場者の皆さんに参加してもらい楽しんでいただくことができました。

また、可愛いワンちゃんたちがステージに集まった「忠犬ハチ公」チーム対抗の企画「ぴょんぴょこあいらんど」、楽しい実験を行った「おこさまランチ」と、来場者の皆さんに楽しんでいただきました。

そして、厚木市民団体によるハーモニカや、ウィンドオーケストラ部による演奏、よさこいソーラン同好会による「愛舞～アイマイ～２００８」では迫力のある演舞、学内の選りすぐりのバンドマン＆バンドウーマンたちによる「らいぶ☆ふぇすた２００８」では熱いライブを披露してもらいました。

今年初の企画は、早食い企画の「はよ！食いねぇ！！」、劇とゲームを交えた「大根マン　大ちゃん」も参加者に限らず・会場の皆様にも楽しんでいただきました。

学生メインの企画では、農大のミス・ミスターを決める「ＮＢＣ～ＮＯＤＡＩ　ＢＥＡＵＴＹ　ＣＯＮＴＥＳＴ」、農大のメンズを華麗に変身させた女装コンテスト「不気味の国のアリス」、前夜祭当日まで企画内容秘密であった「ＴＯＮＩＧＨＴ」などの企画を行い、会場の皆様を大いに盛り上げました。

そして、来年度の収穫祭は第10回、畜産学科開設60周年といった記念すべき年であるので、印象に残り、楽しんでいただける企画を作り上げたいと思います。

宣伝隊

宣伝隊とは、東京農業大学厚木キャンパスのモチーフである大根と鮎の柄入った白い浴衣に、臙脂色の法被を着て、白足袋を履き、全学応援団とともに厚木市内、市外のお祭りや、本厚木駅周辺の駅に宣伝活動をしに行きます。そして、各駅で収穫祭の宣伝ビラを配ったり、各駅での宣伝の最後には大根踊りを踊ったりと農大ならではのパフォーマンスも行い、多くの人に農大の収穫祭を知ってもらおうと頑張っている部門です。

収穫祭当日までの活動は、八月初旬に行われる「鮎まつり」のＤＡＮＢＥフェスティバルから始まり、九月中旬からの土日は、本厚木駅の周辺の各駅で商店街などにある商店にビラやポスターを置かせてもらったりします。地域の方々の協力なしには宣伝活動はできません。そして十月にはいると、さらに宣伝活動は増し、野菜無料配布も兼ねた全学応援団のリーダー公開を行うＳＡＴＹ前宣伝活動、三学科で神輿を練り歩く、厚木一番街でのパレード、市外の活動は伊勢原畜産祭りなどに参加しています。来年度はより多くのお祭りに積極的に参加する予定です。

収穫祭当日は、午前と午後の一日二回に分けて野菜の無料配布を行い、二日間で計四回行います。野菜は大根柄の入った桃色の浴衣を着た農大生に配ってもらっています。野菜無料配布時間の少し前になると長蛇の列になり、宣伝隊は必死に警備します。そして、講義棟二・三階を使った「ちびっこアートギャラリー」というイベントも行っています。

幼稚園児や小学生のみんなに絵を描いてもらい、それを農大に飾ることで収穫祭に足を運んでもらおうというものです。みんなに描いてもらった絵は見ていると本当に癒されます。

宣伝隊は、五月頃から毎週会議を重ね、各駅宣伝活動やイベントの前には必ず会議資料を作り、事前会議を行い、宣伝活動に臨んでいます。統一本部の方々の参加があって成り立つ活動でもあります。

宣伝活動を行っていると、地域の方々に「今年も収穫祭行くからね。」、「頑張ってね！」などと、たくさんのあたたかい言葉をかけていただき、いつも頑張る元気の源となっています。本当に地域の方々と密接に関われる部門です。

来年度は宣伝活動の場をさらに広げ、全学応援団・宣伝隊・統一本部のみんなとともに頑張っていきたいです。

神輿部門とは、宣伝隊に属し、神輿を製作する。10月に行われる厚木市内でのパレードが神輿の晴れ舞台!! 完成した神輿を学科ごとに担ぎ、市内を暴れ回り、収穫祭にむけて各々モチベーションを上げる。集客。2つの大きな役割がある。

作業は8月中旬から本格的に作り始める。担ぎ棒の1本1本や細かい装飾、厚木パレードでの衣装作りと作業は多種多様。構造はかなり本格的であり学生10人でやっと運ぶ事ができるくらいです。

もちろん素晴らしい神輿を作るのも大切ですが、『盛り上げる』＝神輿の最も大きな役割だと自分は思います。

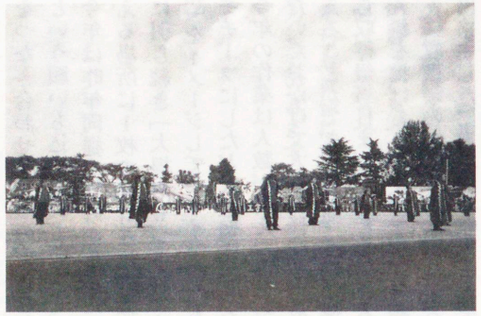
体育祭

今年の体育祭は、厚木キャンパスの学生にとっては収穫祭の後1日あけての開催となり、例年に比べて余裕を持って臨むことができました。また、大勢の研究室の方々にも参加して頂き、畜産学科は今までにない盛り上がりを見せることができました。結果は応援の部七位、競技の部十位、総合八位ということで、決して良い成績とは言えませんが、競技の中で最も力を入れていた綱引きで三位を獲得できたことは、大きな収穫だったと思います。これにより事前にルールを確認し、練習することの重要性を実感することができたので、来年は早い時期から練習を始め、競技の部の成績を改善したいと思います。

応援の部ではロックやチア、そして歌いながら踊るというミュージカル風のフィナーレなどを取り入れ、今までにない斬新な演舞を作り上げることができました。残念ながら結果には上手く繋がりませんでしたが、多くの方から称賛のお言葉を頂き非常に嬉しく思っています。来年もまた他学科を驚かせるような何かを考えたいと思っているので、是非ご期待下さい。

今年は順位にこそ表れませんでしたが、畜産学科にとって大きな一歩を踏み出せた年であることに違いないと思います。来年は畜産学科創立六十周年、そして十二年に一度の丑年です。この節目の年に、統一本部だけでなく畜産学科全体が一丸となって、記録にも記憶にも残る体育祭を作り上げていけたらなと思います。畜産学科統一本部・体育

祭では、体育祭に参加して頂いた全ての方に、「参加して良かった。」と思って頂けるよう一杯努力いたしますので、皆様のご協力をお願い致します。



櫓装飾

「櫓」とは、毎年世田谷キャンパスで行われる体育祭での各学科の応援席のようなものです。大きさで言うと高さ5m50cm、横幅9m、奥行き約3mの巨大な作品です。

本年度の畜産学科の櫓は、パネルの背景色を畜産学科のイメージカラーである「赤」に決め、見てくれる皆さんの目を第1に引きつけるとともに第1印象で残って欲しいという思いで原色の赤にしました。

そして、今年はみんなが1つとなり力を合わせて体育祭を盛り上げていこうという思いからテーマを「絆」にしました。そこで十二支すべての動物を描くことを試み、パネルの中央部には十二支で形取られた方位図の中央にみんなの手形で花を描くと同時にみんなが手を合わせている様子を表現しました。

この作品は準備、組み立てに至る様々な部分でみんなの協力があってこそ完成することができたのだと思います。特に今年は十二支すべての動物を描くにあたって1つにかかる時間が長く予想以上に時間を費やし、本当にみんなの協力がなければできませんでした。みんなの思いの込められた十二支、結果は惜しくも4位で入賞とまではいきませんでしたが、その過程の中でたくさんの人に支えられ、助けられ、「絆」を深めることができたことは私にとって結果以上のものを与えてくれました。

研究棟アート

研究棟アートとは研究棟の壁一面に巨大な絵を掲げ、収穫祭が間近であることを知らせ、より多くの人に来ていただきたいという宣伝のために作られたものです。

この絵は縦15メートル、横12メートルの白い布を12本繋ぎ合わせることによって出来上がります。その大きさは約14平方メートルにもなります。この絵のようにみんなで力をつなぎ合わせ、1つの大きな収穫祭を作り上げていこうという願いも込められています。

今年は昨年同様、校外から見える場所に2枚、校内から見える場所に1枚の合計3枚の絵を掲げました。今年は昨年に引き続き「大根をもつ牛」シリーズと収穫祭の文字を「和」をイメージしてデザインしたもの、そして大々的に「牛」をモチーフにしたどれも個性豊かな作品に仕上がりました。

今年の作業は人数が増えたことや多くの方々に協力していただいたおかげで大きな怪我や事故もなく作業をスムーズに終えることができました。本祭1週間前から収穫祭当日まで3枚とも破れることなく絵を掲げることができ、より多くの方々に収穫祭の知らせをお届けすることが出来ました。また、このアートを通してみんなの力が1つとなり、収穫祭の成功への祈りやこの収穫祭が全て手作りの文化祭であるということも皆様にも伝えすることが出来たことと思います。

家畜苑

家畜苑は動物園ではありません。家畜という経済動物を展示しているところです。経済動物とは、その生産物（乳、肉、卵、毛、毛皮、労働力など）を人が使うために飼育している動物のことです。来場して下さった皆様に、楽しかった!!勉強になった!!最高だった!!というすばらしい気持ちになってほしいと考えている私たちは、さまざまのイベントや展示で皆様をお出迎えいたしております。

ここで！人気家畜ランキングベスト3!!

（家畜苑関係者の判断にて。）

第三位…「牛」!! 第二位……「ラマ」!! そして栄えある第一位は!!……「ひよこ」!! ということになりました!!やはりひよこは子供たちに大人気です。触れ合いコーナーでは、ひよこが手の中でうとうとしている姿をみると心が安らぎます!!

ラマとはラクダ科の家畜で、毛を刈り、それを衣服などに使います。なんと！そのラマの背中に乗ることができます。めったにできない体験ですよ。本当に。しかし、いじめすぎるとツバが飛んできます。クチャクチャ言い出したら要注意。

牛は、牛乳を搾る乳牛と、牛肉になる肉牛がいます。翌年がウシ年だったということもあり、写真撮影がとても人気でした！

このほかにも、豚、[illegible]、やぎ、羊などの家畜を展示しています。スタンプラリ[illegible]やクイズなどで賞品もゲットできます!!ほかにもたくさんのイベントを用意していますが、それは来てからのお楽しみです。

楽しいだけでなく、皆様にしっかりと心に刻んでもらいたいことがあります。最初でも言ったように、ここで展示されている家畜たちは人間のために生き、そして人間のために命を落とします。その家畜たちと触れ合い、命の尊さ、食べ物や生産物の大切さを感じてもらえれば幸いだと思っています。楽しくて、奥の深い家畜苑。これからも皆様にさまざまなことを感じていただけるよう、努力していきます。

【結果発表】

体育祭

総合順位……第8位
競技の部……第10位
綱引き……第3位
応援の部……第7位
櫓装飾の部……第4位

12月12日に第9回収穫祭及び第一一七回体育祭の反省会を行いました。
部門ごとに反省点や来年に向けての改善点を発表してもらいました。

［特別企画］
・台本をもっと早く終わらせる
・1年生になかなか手伝ってもらうことができなかった。
・相思相愛では特別なゴールドが出回らなかった。
・昔は芝生でやっていたが、今と比べてどうか？
→芝生の方がやりやすかった。無線機が他のところと混ざってしまった
・厚木オリジナルの企画を作ったらどうだろうか？
→世田谷には野外劇がある。野外劇ではなくても、三学科で

［宣伝隊］
・宣伝隊の活動に畜産学科の生徒はどれくらい参加しているのか？
→基本宣伝隊のみだがビラ作りや各駅宣伝には1年生に手伝ってもらう。ただし各駅宣伝は人数が決まっている。厚木パレードには統一全員が参加。
・宣伝活動は一般向けが多いが生徒向けのものはないのか？生徒向けに宣伝をすることで、体育祭への参加者が増えたり盛り上がるのではないか？
→そのために、フレッシュンセミナーや1年次のオリエンテーション、夏の1年実習に統一が参加し、畜友会の活動内容を説明する。
畜産だけの宣伝は特にないが、今回初めて学生向きに昼休みにけやきで放送を行った。

［神輿］
・作業の部屋のカギを毎日返さないといけないのに、返していなかった。
→来年は当番を決めたりする。
・作業の部屋の付近の喫煙のマナー。
・作業の部屋は神輿だけでなく他部門も使用しているので、道具が混ざって不便ではないか？
→道具入れを作る。1回1回片付けをする。

［体育祭］
・衣装の準備をもっと早く。
・参加してもらえるように、先生や生徒の呼びかけをもっと早い段階で行う。
・当日の流れがよくわからなかったので、前もって出る人を決める。
・統一のみ参加している感じになっている。
・競技の練習をきちんとする。
→綱引きは練習したので成績が良かった。

［櫓］
・早く作業を始めた。作業がぎりぎりになった。

・大変なものから書いたらバランスが悪くなった
・単管の作業は女の子が来てやることがなかった
→人数を考える。

［装飾］
・三枚目（外から見える1枚）の役目をきっちりすること。宣伝の意味があるので字をもっと大きく見やすく。
→今年作ってみてどのくらいの大きさに書いたらどのくらいの大きさで見えるか分かったので、来年は大丈夫ではないか。
・風の影響で破れてないかチェックしなければならなかったので、構造を考える。
・三枚それぞれ年代に合わせて絵を考えてみたらどうだろうか？
・ミシンなどで手伝いにくい。
→色塗りはみんなで出来る。
・絵はあんまり複雑でも・・
→いかに単純に農大らしさを出すか。

［家畜苑］
・作業の順序を変えたため、説明文がしっかりしたものが出来なかった。
・当日、鉛筆などが足りなかった。
・当日、開園時間前にお客さんが来たため、ミーティングが出来なかった。
→その場で指示するしかない。

・イベントの宣伝。
・動物を触った後に手を洗ってもらうようにする。もしくは、ウエットティッシュ。
・来年は子供向けのイベントだけでなく、大人向けの企画があってもいいのではないか？
→先生に講義をしていただくなど。

次期統一委員長より

1年間を振り返って…

統一本部次期委員長
2年　大谷　敬直

今年1年間、自分は畜産学科統一本部副統一委員長を務めさせていただきました。この1年は正直、辛さと不安とプレッシャーに押し潰されました。（苦笑）

自分は人の上に立って指示する事がとても苦手であるのは分っていたので、みんなと楽しみや辛さを分かちあって1つ1つやっていきたいと思っていました。

しかし、実際はそんなに甘くなかった。みんなで分かち合ってやっていくには「団結力」が必要でした。それをちゃんと考えていなかった自分は、上手く2年生をまとめることが出来ませんでした。自分の力不足で、みんなの気持ちがバラバラになってしまった時もあります。

収穫祭準備が忙しくなり、終夜作業が始まると、みんなと毎日毎晩顔を会わせ、自然と話す機会も増えました。みんなの笑顔を見ると、まだまだ頑張ろうと思いました。作業の大変さも分かり合えた気がします。何となくですが、徐々に団結してきたようにも思えました。そう考えたら、毎日が次第に楽しくなりました。

そして、完成式や厚パレ、本部開きと1つ1つ行事が終わり、収穫祭当日はアッと言う間に過ぎ、体育祭は応援合戦をはじめとして全体的に畜産学科が1番盛り上がっていたと思います。

今年1年間は本当にアッと言う間でした。来年はもう引退学年。少し寂しい気もしますが、今年の反省点や良かった点を活かして今年以上のものを作りあげたいと思います。

また、来年度は丑年と第10回厚木キャンパス収穫祭、畜産学科創立60周年ということで誰から見ても「今年は畜産の年だ」だと思われるような収穫祭・体育祭にしていきたいです！

最後に、3年生の先輩方！心配や迷惑をたくさんおかけしてすみませんでした。先輩と一緒に過ごせた日々は財産です！本当に3年間お疲れ様でした!!

2年生！何度も叱ってくれてありがとう。

また、門司先生をはじめとする先生方、来年度もご指導の方をよろしくお願いします。

東京農業大学農学部畜産学科
“畜友会”会則

第一章　総則

第一条　本会は東京農業大学農学部畜産学科畜友会と称する。

第二条　本会は事務局を東京農業大学農学部畜産学科内に置く。

第三条　本会は会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的とする。

第二章　業務

第四条　本会は第三条の目的達成のために次の事業を行う。

(1)会員相互の親睦
(2)講習会、研修会及び研究会発表の開催
(3)機関紙「ふじみの」の発刊
(4)大学行事（収穫祭等）への参加
(5)その他第三条に付帯する業務

第三章　会員及び役員

第五条　本会の会員は次の通りとする。

(1)正会員　畜産学科の学生
(2)特別会員　畜産学科教職員ならびに大学院生
(3)名誉会員　役員会の推薦を受け、総会の承認を得た者。

第六条　本会は次の役員を置く。

(1)会長　1名
(2)副会長　2名
(3)執行委員
委員長　1名
副委員長　2名
書記　2名
会計　2名
渉外　2名
企画　2名
庶務　2名
編集　2名
監事　4名

第七条　(1)会長は会を代表し、会務を総理する。副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれを代理とする。また1名は総務を他の1名は会計を分担する。

(2)委員長は会長の指示を受け、執行委員会を統括する。副委員長は委員長を補佐し、委員長不在の時はその代理をする。各委員長はそれぞれの会務を分担執行する。

第八条 (1)本会には連絡委員を置く。
(2)連絡委員は1、2年次からそれぞれ4名、各研究室から1名選出する。連絡委員は各学年および各研究室の意見を掌握し、連絡委員会でその意見を反映するとともに執行委員会の決定事項を会員に伝達する。

第九条 役員および連絡委員の選出および任期
(1)会長は畜産学科長がこの任にあたる。副会長および監事は、会長が畜産学科教職員の中から推薦し、総会において決定する。
(2)執行委員は、執行委員会の推薦に基づき総会において決定する。但し、委員長は3年次生、各執行委員の2名の内1名は3年次生、ほかの1名を2年次生より選出するものとする。
尚、監事4名の内の2名は畜産学科教職員がその任にあたる。また、監事は他の役員を兼任することはできず、その任期は原則として1年とし、再任を妨げない。
(3)執行委員に欠員を生じた場合は、執行委員会に諮り補充することができる。
(4)連絡委員は、各学科〔1、2年次〕および各研究室〔3、4年次〕で協議のうえ選出する。また、任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

第四章 総会

第十条 (1)総会は定期総会とする。
(2)総会は正会員および特別会員を持って構成され、本会の最高意思決定機関とする。
(3)定期総会は原則として年一回、六月に会長が招集し、開催する。
(4)臨時総会は会長が必要と認めた場合ならびに正会員および特別会員総数の四分の一以上の同意を得て開催目的および招集理由を記載し、会長に提出する時招集開催することができる。

第十一条 総会開催は七日以前に公示しなければならない。

第十二条 (1)総会は正会員および特別会員の四分の一以上の出席により成立する。
(2)委任状は所定の用紙に署名捺印のうえ議長に一任する。
委任状は総会の定足数に含まれるが、正会員および特別会員の五分の一を上限とする。
(3)委任状の検査は執行委員が行う。

第十三条 定期総会は次の事項を決議する。
① 前年度の事業報告および収支決算報告
② 次年度の役員
③ 次年度の事業計画および収支予算
④ 会則の改正
⑤ その他

第十四条 総会における議長は総会においてその都度互選する。尚、必要に応じて議長は副議長を指名することができる。

第十五条 議長は書記2名と議事録署名人2名を選出する。尚、議事録署名人の内1名は畜産学科教職員とする。

第十六条 総会の議決は出席者の過半数によって議決され、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第十七条 総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者には委任状は含まない。

第五章 執行委員会および連絡委員会

第十八条 (1)第六条(3)の執行委員会は本会の最高執行機関たる執行委員会を構成する。
(2)会長および副会長は必要に応じて執行委員会に出席することが出来る。

第十九条 執行委員会は原則として月一回委員長が招集する。執行委員会は執行委員の3分の2以上により成立する。執行委員会の議長は委員長が勤め、出席者の過半数より可決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第二十条 執行委員会は総会の議決に基づき、本会の目的遂行に関する一切の会務を執行処理する。

第二十一条 執行委員会で議決された事項について、委員長は会長および副会長に文章で必ず報告する。

第二十二条 連絡委員会は委員長が総会前に必ず招集開催する。また、委員長が必要を認めた場合に開催することができる。
(1)連絡委員会には執行委員および連絡委員が出席する。議長は委員長が務める。
(2)連絡委員会は次の事項を処理する。
①執行委員会で決定した事項の伝達。
②一、二年次および各研究室からの意見の聴集および意見交換。
(3)連絡委員会には必要に応じて会長、副会長も出席することが出来る。

第二十三条 本会の事業年度および会計年度は六月一日に始まり、翌年の五月末日までとする。

第六章 会計

第二十四条 本会の運営は会費および寄付金ならびにその他の収入を以ってこれにあてる。
但し、第四条の目的を達成のため臨時徴収する場合もある。

第二十五条 (1)会費は年間二、五〇〇円とし、入学時に一括して一〇、〇〇〇円を納入する。編入・転学科学生は学年に応じた金額を一括納入する。但し、一度納入した会費は返金しない。
しかし、入学取り消しの場合はその限りではない。

(2)会費は会長および委員長連名で毎年4月に入学対象者に対して請求するものとする。

第二十六条　本会の会計は、所定の形式に従って処理し、決算はすべて監事の監査を経なければならない。

第七章　機関紙「ふじみの」編集発行

第二十七条　(1)第四条(3)の目的達成の為に編集委員会を設ける。

(2)編集委員会の委員は執行委員および正委員の中から若干名選出する。

(3)編集委員会の責任者は編集委員のうち1名が担当する。

(4)編集委員会は機関紙「ふじみの」の編集発行を責任もって執行する。

第八章　大学行事への参加

第二十八条　(1)第四条(4)の目的達成の為に必要に応じて委員会を設ける。

(2)設けた委員会は本会の目的達成の為に執行委員会の意思を受け運営する。

尚、内規は別に定める。

(3)委員会の責任者は執行委員の内1名が必ず当たる。構成員については、正会員の中から必要に応じた人数を選出する。

第九章　監査

第二十九条　監事は本会が目的達成の為、円滑に業務を執行しているか否かを監査する。

第三十条　監事は前条目的の為業務監査および会計監査を行い、その結果を総会において報告する。尚、必要と認めた場合は臨時監査することができる。

第十章　付則

第三十一条　本規定の最終解釈は役員会で行う。

第三十二条　本会則は前規約を改正し、平成一〇年二月二〇日よりこれを試行する。

畜友会収穫祭内規

第一章　目的

第一条　本内規は東京農業大学農学部畜産学科畜友会会則（以後畜友会会則と称す）第28条によりこれを定める。

第二条　収穫祭は東京農業大学農友会厚木支部収穫祭規定第1条および第9条に基づく収穫祭に参加する。

第二章　組織および役員

第三条　収穫祭を円滑に運営するため畜産学科収穫祭実行委員会（以後実行委員会と称す）として次の組織を置く（以後6本部と称す）。

1、統一本部
2、宣伝隊実行本部
3、特別企画実行本部
4、学内装飾実行本部
5、家畜苑実行本部
6、体育祭実行本部

第四条　実行委員会に次の役員を置き、会務を処理する。

会長	1名
副会長	2名
統一本部顧問	若干名
統一本部委員長	1名
統一本部副委員長	1名
統一本部会計	1名
各実行本部顧問	若干名
各実行本部責任者	各1名
各実行本部副責任者	各1名
各実行本部会計	各1名

第五条　(1)会長は畜友会会長がこれにあたる。副会長は畜友会副会長がこれにあたる。

(2)統一本部顧問および各実行本部顧問は畜産学科教職員より会長がこれを委嘱する。

(3)統一本部委員長は畜友会執行委員がこれにあたる。統一本部副委員長、統一本部会計、各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部会計は統一本部委員長が畜友会執行委員会の承認を得た後、会長および各実行本部顧問の了承を得てから委嘱する。

(4)統一本部および各実行本部の担当者は正会員の中から募集し、統一本部委員長がこれを委嘱する。

第六条　(1)会長は会務を統括する。副会長は会長を補佐し、会長に事故があるときはこれを代理する。

(2)統一本部顧問および各実行本部顧問は統一本部および各実行本部の指導にあたる。

(3)統一本部委員長は各実行本部を統括する。統一本部副委員長は統一本部委員長を補佐すると共に統一本部担当者と協力して各本部の円滑な運営活動を助ける。

(4)各実行本部責任者は各実行本部の運営を担当する。各実行本部副責任者は各実行本部責任者を補佐すると共に各実行本部担当者と協力して円滑な運営・実施にあたる。

第七条　実行委員会の機関として6本部会議および各実行本部会議を置く。

(1)6本部会議は会長、副会長、各実行本部顧問、統一本部委員長、統一本部副委員長および統一本部会計ならびに各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部会計で構成し、畜産学科収穫祭全体の重要事項を審議する。6本部会議の議長は統一本部委員長がこれを務める。

(2)各実行本部会議は統一本部委員長、統一本部副委員長、各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部担当者で構成し、各実行本部の運営活動を審議する。各実行本部会議の議長は各実行本部責任者がこれを務める。

第三章　会　計

第八条　収穫祭の会計は特別会計として畜友会収穫祭援助費および農友会厚木支部収穫祭助成金ならびにその他の収入をもってこれにあてる。

第九条　予算は畜友会執行委員会で編成し畜友会定期総会で承認を得る。

第十条　会計処理は別に定める。「会計処理取扱細則」によって処理する。

第十一条　決算書は統一本部がこれを作成し、畜友会執行委員会に諮り、畜友会監査を受けた後、畜友会定期総会で承認を得る。

第四章　付　則

第十二条　本内規の改正は6本部会議で原案を作成し、畜友会執行委員会に諮った後、畜友会定期総会で承認を得る。

第十三条　本内規は平成15年6月1日よりこれを実施する。

各部門委員長より

☆駆け抜けた青春☆

統一本部委員長
3年　西村　光平

統一本部を振り返ってみると、ホントにくだらない事で笑いあったり、喧嘩したり、泣いたり、楽しんだりしたなと思う。時には全員で真剣に考え込んだり、歌を歌ったり、追い駆けまわったりもした。こんな何気ないみんなとの毎日が、自分にとって一番居心地の良い場所であり時間であった。

自分は統一委員長として常に思っていた事がある。

それは、「一歩出たら二歩さがる」という事だ。委員長になるまでの自分は、何でも自分だけで先走ったり、空回りをしてみんなに迷惑をかけたり、落ち着きがなかった。そして、一人で生きていく事に限界を感じ、みんなに気づかされた。それは、任せあう責任というものだ。任せるという事は、簡単そうに思えるかもしれないが、実際難しいものである。信じ合い、仲間意識を高めることで初めてお互いが任せ合えるのだ。こういった、「任せ・任せられる」の世界を自然と作り上げることができれば、個々が責任感を持って考え行動し、モチベーションも力量も上がると思う。無理に一人の人間が引っ張ろうとせず、地味かもしれないが、日々の関わりと思いやりの積み重ねが、一番親密な良き団体になる最短の方法だと考える。自分は、統一委員長であるからといって、偉そうな態度や、やりたい放題するだけの委員長にはなりたくなかった。学科内での作業中は、それぞれの役職があり委員長がいるのだから、任せる所は任せ、常に作業中は、他の3年生と同じ土台と目線の立場でいるようにした。そして、他学科絡みの団体としての関わり合いを持つ場合の時のみ、自分が先に一歩前に出て、統一委員長として畜産学科の雰囲気を全面的に出していこうと常に思っていた。こうやって委員長として堂々としていられたのも、みんなの支えがあり、こんな最強で最高な仲間に出会えた事にある。

次に、良き後輩に残したい言葉がある。「一歩踏み出す勇気を持つ事を忘れない事」である。初めから行動せずにとどまっている人間よりも、失敗してもいいから踏み出した人間の方が数倍強い糧となる。ためにならない時間はあるが、ためにならない行動という経験は存在しない。信じるか信じないかは、自分の脚で一歩踏み出し確認し、また新しき統一本部を作り上げてもらいたい。

最後になるが、「この世には、出会ってはいけない人はいない。」そう信じて、畜産学科統一本部統一委員長の最後の言葉としたい。

これから先の人生も全力で走り続けたいと思う。ありがとうございました。

スマイリーイヤー2008

特別企画委員長
3年　大　岡　　り　え

２００８年、第９回収穫祭特別企画本部がスタートする前に決めたことが２つあります。１つ目は、一つの企画を二人三脚で作っていくこと『２コ１』。２つ目は自分たちも楽しんでやれようにいつでも笑っているように『スマイリー』。

企画会議は２月から始まり、総務、農学、バイオセラピーが参加し個性の強いメンツで２００９年のトッキーズは始動しました。

去年よりも素晴らしいステージにしなきゃ、私たちらしいって何？と考えすぎて落ち込んだ時期もありましたが、落ち込んだときは統一の仲間が励ましてくれたりして、気分転換に下山をして遊びに行ったりしたのも良い思い出です。

相方である吉田武史とは授業以外で別なときはないのでは？というくらい一緒で、笑いすぎてお腹が痛くなったり、意見の違いで喧嘩をし、泣いたこともありました。たった一時間の企画のために何ヶ月前から考え、細かいところにも私達らしさを出したく、朝日が出るまで作業していたこともありました。始まるまで不安で二人三脚で作り上げてステージに満足できているのか不安でしたが、参加してくれて人たちの楽しそうな笑顔は見て満足することができました。参加者の笑顔をみることができ満足です。

ＴＫＣへ。いつもワガママ聞いてくれてありがとう。こんな頼りないリエについてきてくれてありがとう。感謝すること言葉しか出ません。リエの相方はＴＫＣじゃなちゃ無理だった気がします（笑）

いつもギリギリで作業してごめんね。

また、企画に参加して頂いた先生方、各団体、各研究室の皆様ありがとうございました。

最後になりましたが、第９回収穫祭特別企画本部を支えて頂いた参与の先生方、ならびに収穫祭実行本部、農友会各支部の皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。

第９回　宣伝隊！がんばれ！

宣伝隊隊長
3年　芦　澤　　友喜乃

ふじみののこのページを書かせていただくのも２回目になりました。

昨年から引き続いて第９回も畜産学科宣伝隊隊長を努め、私が今年と昨年の宣伝隊の違いで一番感じたことは、あたりまえではありますが、人数でした。

３学科とも２年が入ってくれて、全体の人数が増えて賑やかになったのももちろんですが、畜産学科宣伝隊としての人数が増えたことが一番私の気持ちの持ちようを変えてくれていました。

私は、昨年の第８回から隊長を努めさせてもらっていましたが、昨年は畜産学科の宣伝隊は私１人だけでした。ですが今年は後輩の３人が入ってくれて４人だったんです。

私ははっきり言って怖い先輩だったと思います。会議ではきつい言い方の発言ばかり、普段だって厳しいことも沢山言いました。でも、３人とも最後まで着いて来てくれました。

初めのうちは、後輩との接し方に戸惑ってしまいましたが、やっぱり、同じ学科に仲間がいるということはとても幸せなことでした。宣伝隊は他の多くの部門と異なり、厚木３学科でまとまって活動し、学科ごととなる活動はあまり無いので、昨年１人でやっていた時もそこまで孤独感を感じたりすることはなかったのですが、今年は同じ学科に仲間がいることの違いをとても感じました。

３人が入ってくれて、４人になって、一緒に炊き出しを食べに行ったり、一緒に体育祭の練習に行ったり、学科の開きや閉めで４人で並んで挨拶をしたり先生方に挨拶に回ったり、もちろん土日の宣伝活動の最初にやる開会式では４人で２列に並ぶことができる。小さなことでも、１人と４人の違いを感じて嬉しくてしかたがなかったです。

１人じゃないって本当に素敵なことで、３人のおかげで私の最後のシーズンは最高でした！ぎこちなかった春から、鮎まつりや各駅店回りの夏を過ぎて、ブレハブが寒くてつらくなってきた秋を迎えて、どんどん仲良くなれて、会議とかで炊き出しの時間に遅れても４人で行って一つのテーブルを囲んで食べて、宣伝“隊”なんだなぁ、と毎日が楽しかった。楽しすぎて、調子にのって私が先輩らしからぬことをしていたら３人が叱ってくれたこともありました。

ゆいか、あんこ、太郎。３人も私と同じ以上にこの一年を楽しかったと振り返っていてくれていることを願います。こんな先輩に着いて来てくれて本当にありがとう。３人と過ごしたこの何ヶ月かは最高の思い出です。

最後になりましたが、第９回収穫祭宣伝隊を支えてくださいました参与の先生方、並びに収穫祭実行本部、農友会各部の皆さんにこの場をお借りしてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

神輿ありがとう

神輿隊長
3年　田辺　義高

今回、畜産学科統一本部神輿部門の隊長を務めさせてもらったのですが、今思い返してみたら、大学一年生で神輿に誘ってもらってから三年目、道具の使い方や木の切り方、組み上げ方はずいぶん上達したと思います。しかし、神輿の設計が上手に出来なかったり、遅刻が多かったりと、三年の浩司（甲斐田　浩司）には迷惑をかけてしまった。

隊長として皆を引っ張っていけない私だったが、浩司をはじめ、しも、あえが困った時いつも助けてくれた。神輿の良い案が出ない時、皆集まれずなかなか作業が進まない時、自分には出せない案を浩司、しも、あえが出してくれ、三年生が来れない時はしも、あえだけで作業を進めてくれている。皆が作業を一緒に頑張ってくれる姿が私は嬉しかったです。

体育祭の最後、ファイヤーストームで一緒に泣いていた皆を見たら、私は涙が止まりませんでした。その時神輿を皆で作ってこれて良かったと心から思いました。

神輿作製で学んだことは数多くあり、どれも大切なものになりました。それに浩司、しも、あえで笑ったり、泣いた時のことは私の生涯に残るものになりました。今回から神輿は体育祭で点数には加算もされなくなりましたが、私自身畜産学科の神輿はどの学科にも負けない素晴らしいものになったと思います。最後まで一緒に神輿を作ってきた浩司、しも、あえ、本当にありがとう。

等身大の・・・

体育祭委員長
3年　坂井　佑太

今振り返れば2年前何気なく入った畜統で、感動を覚えたのは体育祭で、その時の委員長だったハルさんに憧れて、いつかこの人のようになりたいと思って体育祭に入りました。

本格的に体育祭の活動が始まってからは先輩の足を引っ張ってばかりで、何も出来ず、怒られてばかりだったということを思い出します。しかし気づかない間にたくさんのことを学んでいたと思います。

3年生になり委員長としてやっていくんだという時、正直尋常じゃない不安でいっぱいでした。めざせ「優勝」とは言ったものの、裁縫や踊りが得意なワケじゃないし、応援合戦の練習を仕切ったりするのも苦手で、思うように人も集まらず、失敗と反省の毎日でした。そんな自分を支えてくれたのが、2年生のはーちゃんと、ユキですが、この2人はとても優秀で自分についていくことに対して無理をさせてきたと思います、2人のおかげで今までやってこれました、2人にはいろんな場面で助けられ温かささえ感じてしまいました。

他の2年生にも励まされることが多々あり、この団結力は例年以上じゃないのかとすら感じてしまいました。

そして、3年生の仲間たち、委員長含めそれぞれの作業があるのに夜遅くまで練習してくれたり、常に積極的で、自分の事を理解してくれる言動には感動すらしてしまいました。

学生生活の半分以上を体育祭に捧げました、本年度の体育祭は思うような結果は残せず、得られたものは少しの思い出だけです・・・

しかし、それこそが大切なのだと思います、この経験が自分を成長させてくれたし、一生の思い出、形には残らない宝物です。

自分たちの作った体育祭で、皆の嬉しかったり、悲しかったり、楽しかったり、悔しかったりといった全ての感情を全身で感じることができ、本当に体育祭でよかったと思います。自分にはこんなにも素敵な仲間がいる。本当にありがとう。

最後になりましたが、第一一七回体育祭を支えて下さった参与の先生方、各研究室の皆様、学内の皆様、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

櫓に出会って

櫓装飾委員長
3年　尾内　泰穂

スポレクのとき、光平に誘われて入った畜統。右も左もわからず入った部門は『櫓』だった。それが『櫓』との初めての出会い。『櫓』とは世田谷キャンパスで行われる体育祭での応援席です。自分の担当はその応援席の装飾です。

正直絵を描くのは苦手でした(笑)去年は抄子さんに迷惑かけっぱなしの一年。自分とじゃなかったらもっといい作品が出来たんじゃないか?とかほんとに自分はここに必要なのかな?とかネガティブに考えて逃げ出したくなって、結果、顔に出てしまって抄子さんに嫌な思いをさせてしまったと思う。

そんな嫌な思いをこれから入ってくる後輩たちにはさせないように『嫌な気持ちを表情に出さないこと』『物事をポジティブに考えること』をまず目標とした。各部門の下の子が決まって、櫓には手がかかるけどよく気が利く翔とマイペースだけどすごいセンスを持った満里子が入った。

今年の櫓は、ネズミ年ということがあったのでネズミも一員の十二支を櫓一面に描こうということになった。しかし12匹の動物たちを描くのは大変で、絵も決まらなかったりしてなかなか作業は進まなかった。今年は余裕を持って9月の頭から作業を始めたのに結局ギリギリの完成になってしまった。終夜も出来るだけ減らして、少しでも2人の負担を軽くさせようと思ってたのに、結局夜中の3時、4時までの作業が続いてしまって2人[illegible]安にさせたし体力的にもきつい思いをさせてしまった。

今年は3人だったけど毎日のように手伝いに来てくれる他部門の人たちのおかげで12匹の動物たちは完成した。牛を完璧に蘇らせてくれた光平。猿と兎はうますぎだった友喜乃。終盤の仕上げのときはほんと頼りになった義高、龍を筆頭に随所で光るモノをみせてくれた満里子、いろいろハプニングもあったけど虎をかっこよく仕上げてくれた翔。他にもいろいろな部分で助けてくれた3年生、手伝いに来てくれた2年生、1年生もありがとう。櫓の作業場所はいつも明るかったです。それと家畜苑のみんな、搬入から組み立てまでほんとお世話になりました。頼りになるメンバーで安心して任せられました。

櫓はみんなの協力なくしては出来ないんだなって改めて思いました。完成式のときみんなに手形を押してもらったのも自分の部門が忙しくて手伝えなかった人のために少しでも櫓に携わってもらおうと思ったからとちょっとでも携わったことで少しでもみんなの思い出に残ればなと思ったから。みんなと作ったこの櫓が、一匹一匹にいろんな思い出が詰まったこの櫓が大好きです!みんな、ほんとうにありがとう。そして櫓の魅力を教えてくれた抄子さん、ありがとうございました。それからお世話になりました。

最後に、満里子、翔へ。この一年どうでしたか?最初2人が櫓に入るってなったときどうやって接しよう?うまくやっていけるかな?ってすごく悩みました(笑)最初の目標は達成できてたかなぁ?正直自分がいつも笑っていられたかはわかんないけどいつも第一に2人のことを考えながら作業してたつもりです。駐輪場はほんと寒かったね。よくがんばったね。怪我したり作業中にどっか行っちゃって迷惑かけたり…こんなダメダメな自分に文句も言わずついてきてくれてありがとう。ほんと頼りない委員長でごめんね。けど2人と一緒に作業できて楽しかった。結果は4位だったけど2人と、そしてみんなと作った櫓が評価されたので満足です。多少の悔いはあるけど[illegible]は来年晴らしてくれるよね?来年は2人力合わせて優勝めざしてがんばってください!応援してます。

みんなに支えられて

装飾委員長
3年　遠矢　真理

10月から始まった収穫祭シーズン。気付けば畜統の中で裏番と呼ばれていた。そしてシーズンなかばあたりから畜統のアイドルキャラになぜかなっていて、日々盗撮されて過ごしていた(笑)でも今振り返って思うのは、そのシーズンは大学生活において一番短く、そして一番充実した1ヶ月だった。

作業が始まった当初、不安な事がありすぎて部門を上手くまとめられるかどうか自信がなかった。けどそんな時、後輩になんで装飾を選んだのか聞いたら「オサ(私)が委員長だから」と言ってくれた。冗談で言ったのかもしれないけど私はその言葉をきっかけに前向きになれた。他の子達も「先輩でよかった」という一言などを何気なく言ってくれて、それは私にとって委員長としての自信となり、そして装飾部門に対する熱意にも変わっていった。

そのお陰で不安だった毎日も気付けば笑いの絶えない毎日へと変わっていった。作業工程で一番不安だった下書き作業も想像以上にスムーズに終わり、気付けば3枚目に取り掛かっていた。夜12時から朝6時まで6人全員で力を合わせて描き、作業が終わって体育館の外で見た朝日と空気の気持ちよさは格段に良かった。

装飾の5人のメンバーに対しては今でも感謝の気持ちで一杯です。文句を一つも言わずに付いてきてくれ、そして支えてくれた2年生、キャミ、アキ、マッケン、ケンちゃん。本当にありがとう。そして2年間、色々とぶつかりながらも一緒に付いてきてくれたハルカにはいつも助けられたよ。ハルカ、ありがとう。そしてお疲れ様!!最後に光平をはじめとする3年生、みんなと同じ学年、そして仲間になれて良かった。いつも傍で支えてくれて本当にありがとう。

最後になりましたが、第9回収穫祭を支えて下さりました顧問の先生方、山口さんをはじめとする職員の皆様方にこの場をかりて御礼申しあげます。

支えられた家畜苑

家畜苑委員長
3年　野間口　俊二

畜産学科統一本部に入って、三年が過ぎた。私が家畜苑に入ったのは練習生ＯＢとしての家畜苑への参加がきっかけだった。振り返ると、長かったようで短かったあっという間の三年間の作業が懐かしく思う。家畜苑委員長としてみんなを引っ張って行かなければならないと思っていたのだが……実際は……。

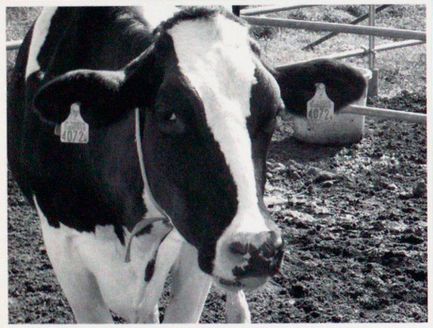
例年になく早く小屋は組み立て終わったのだが、他部門の人、先生から「今年は家畜苑やることが早いなー」と言われ、浮かれ過ぎて作業スピードが落ちてしまい、結果的に、収穫祭の朝まで作業を引っ張ってしまった。

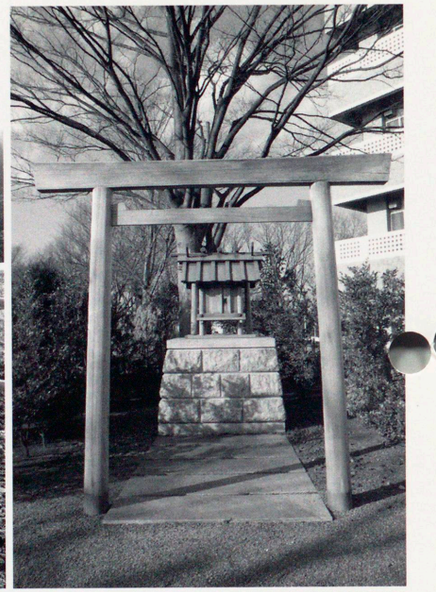
だが、今年の第９回収穫祭家畜苑は大成功であった。今年の家畜苑は牛をメインとして、新たな取り組みとして牛の飼料の展示、記念撮影スポットを設けた。また家畜を借用する富士農場に７品種の育成牛が飼育されており、それに加え、来年の干支も牛ということもあり記念撮影スポット飼料展示と共に大好評だった。また、昨年よりも来苑者が多く感じた。何より、富士農場、研究室の先生からのサポートもあり、去年より教員と作る収穫祭が出来たと感じた。

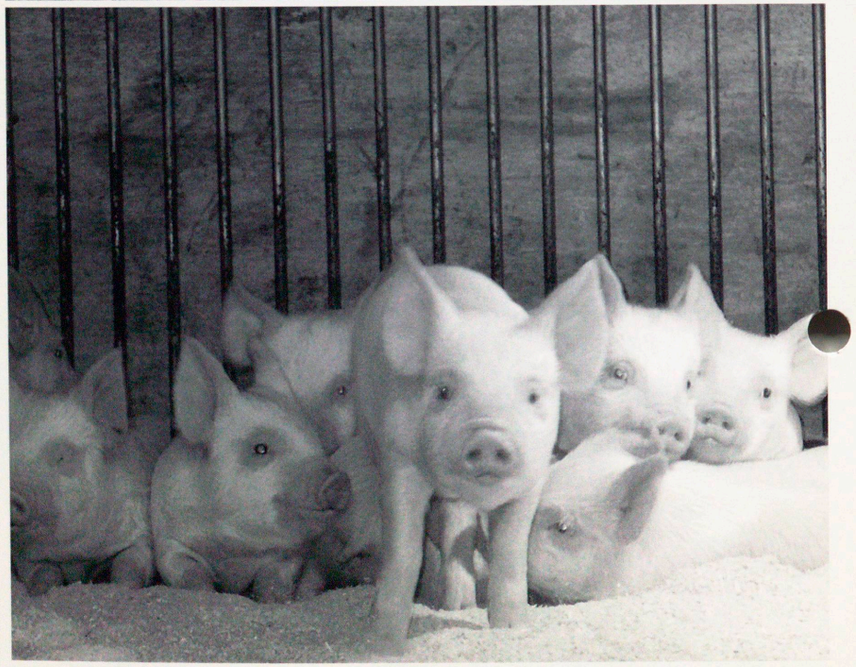
振り返ると、引っ張ってきたというより第９回収穫祭家畜苑はみんなに支えられて出来た収穫祭だった。特に二年生７人の力が大きかった。みんなに言いたい「本当に駄目な委員長でごめんなさい。」そして、「ありがとう。」

来年に向けて森本を中心に７人今まで通りで楽しい家畜苑。より良い家畜苑をつくってくれると期待します。

最後になりましたが、第９回収穫祭家畜苑にご協力して下さった先生方、各研究室の方々、富士農場の方々、練習生の皆様無事第９回収穫祭を無事に終えることが出来ましたことを深く御礼申し上げます。







編集後記

今年も、第45号目となる『ふじみの』を発行することができ、今までの伝統を引き継ぐことが出来たことをうれしく思います。

バイオセラピー学科の増設から3年が経ち、学生数の増加と共に厚木キャンパスにさらに活気があふれてきたと感じます。

第9回収穫祭もたくさんの方々に来ていただき、より地域に密着した行事になってきたことと思います。

この『ふじみの第45号』が、4月で60週年を迎える畜産学科のさらなる発展を担うものになれば幸いです。

最後になりましたが、この一冊を発行するにあたり、お忙しい中原稿を書いて頂いた先生方、学生の皆さん、ならびに会員の方に深く御礼申し上げます。

編集委員長　尾内　泰穂

平成21年3月20日　発行

"ふじみの"第45号

ふじみの執行委員　尾内　泰穂
三宅　美夏
佐藤　晴香

発行者　神奈川県厚木市船子1737
東京農業大学農学部畜産学科畜友会
電話046（270）6228

印刷所　神奈川県厚木市栄町1-15-15
有限会社 藤野印刷所
電話046（221）3029

TOKYO NOUGYO DAIGAKU CHIKUSAN-GAKKA